

506
279



始



506-279



大西利夫脚本集

東京
京都
文
献
書



この集を吉澤義則先生に捧ぐ

大西君は拙者一人が見込みちがひをしたやうに吹聴して居るが、大西君自身も、脚本を書いて、武藤君の店から出版して、その脚本を拙者に見せつけようなどは、此の八月まで夢にも想はなかつた事であらう。

その脚本に就いても誰も勧めもしないのに世評に問はうといふ以上、大西君に於ても自信あつての事であらう。誰も強ひもしないのに出版せうといふ以上、武藤君に於ても自信あつての事であらう。

ちやが、それは見込みである。事實は豫想外に不結果に終らうも知れぬ。また豫想外に成功せうも知れぬ。

拙者に於ても、大西君に見込みをつけて武藤君に薦めた行きが、り上、大西君が名を揚げ、武藤君が金を儲けるやうに祈るのは萬々であるが、さて世の中の事は、靈山大會の赤い花、佛様には分つてゐるやうが、凡夫にはすべて謎ぢや〜。

戊九月

白水郎白す

目次

露の蝶	(大正九年六月大阪中座上演)	九—四六
祇園精舎	(大正十一年七月大阪中座上演)	四七—八九
やれ三味線	(大正十年京都顔見世興行上演)	九—二二八
くろ髪	(大正十一年十月京都明治座上演)	一二九—一七四
やもめ鴉	(大正九年十月大阪中座上演)	一七五—一八六

吉澤先生——

某日私は文献書院主武藤欽氏からの手紙を受取りました。その中に先生の御紹介の名刺があつて『君の卒業論文御出版相成りては如何御勧め申上候』と書かれてあるのを見ました。

早いものです、私があゝの論文を先生がたの眼の前へ叩きつけて——叩きつけたのですほんの間に合せのほご紙の綴つたものを投げ出して、ごうでもして下さいと不貞くされたのでした——大學の門を出てから——いや出して貰つてから——足かけ八年になります。私はその間に何一つ勉強らしい勉強もしませんでした、いろ／＼なことに遭つて可なり物を知りました。その當時でさへ恥かしかつた卒業論文を今日になつて世に出さうなごとは、とても／＼思ひ及ばぬ事です。先生が八年前の私の論文の、題名だけでも臆えてゐて下さいました事を私は非常にありがたく思ひます。然しあんなものを『出版相成ては』と『お勧め』下さいましたのは、恐らくは先生の例の彌次性——失禮な言葉ですが——の發露で、人を煽てたり、ほぐらかしたりしておいでにな

るのだと思ひました。で私は一方では感謝してゐながら、一方では先生も随分ひどい方だと思ひました。

無論その出版の事は斷ることに致しました。然しその代りに生れ出たのがこの集なのです、これは私の卒業論文ではありません。私はまだかうした創作にはほんの入門したばかりの若輩です。私はこの集が藝術的にどんな價値があるかといふやうな事は考へても見ません。勿論この集によつて私の天才を世に問はうなごいふ者は毛頭ありません。唯然し私は私の過去半生の生活を葬つた墓場として、あり合せの石を一つ置いておかうと企てたに過ぎないので。それも武藤氏が希望さへしなかつたら、私は永く筐底からぬき出す事をしなかつたでせう。

私の過去の半生——私はまだ若いのですから物心を覺えてからの時間は幾何にもなつてゐません——然しその間に私は可なりいろ／＼な事を經驗せねばなりません。複雑した家庭のある事情——その爲めに私は十年間不斷の苦惱に耐へてゐねばなりませんでした——可なり極端な壓制と困苦と缺乏と戰つたある生活、金參拾五圓の

月給で犬のやうにこき使はれた新聞記者の下廻り生活、それらのものは同時若しくは順次に私をさいなみました。さうしてそのあげく監獄にまでぶち込まれました。

『禁錮、厳しい規律、並外れた勞役、そんなものは囚人にとつては唯深い嫌惡の情と、禁せられた享樂の渴望と、恐るべき頑固な反抗心を助長する外に、何の効果を齎らさないのだ——』ドストイエヴスキーは彼の『死人の家』にかう書いてゐます。私の監獄生活は僅かに二箇月でしたけれども、私の心の囚人生活はドストイエヴスキーと話が出来る位長うございました。私の心はもうすつかりねちけてしまつてゐます。

然し一方では、私はまた、どんな苦惱にでも石のやうに黙つて、冷たく、泰然と耐へ忍ぶ事にもならされてしまひました。私はもうそんな事に何の恐れも戦きも感じなくなつてゐます。どんな苦みでも私に與へて見るがいく、私は見事に耐へて見せてやらう。だからもう私は誰に遠慮もしなくていくのです。進んで苦みたくはありませんけれど、私を苦しめる者に哀憐を乞はうとも思ひません。好んで敵を作りたくはありませんけれど、特別に私をよく思はれるやうに努めなくてもいくのです。私に氣に入

らぬ人はどんな非難でも攻撃でも迫害でも、私に向つて用捨なくなげつけるが、私は唯それを身一つに引うけていつまでもじつともちこたへてゆく事が出来る。かうして私のねぢけた心はいやが上にもねぢけてゆきます。

實際私のこの傲慢な、不遜な、さうして安價な考へ方も、それをほんとうに自分のものにするまでには、いろ／＼な事を學ばねばなりません。偽善をなす法、こけを威す法、獨りいふ子をきめる法、足もとの明るいうちに逃げ出す法、弱身につけこむ法、拜みたほす法、勇敢に變節すの法、咽喉の下へ這ひ込む法、眞綿で首をしめる法、居なほる法、その外いろ／＼な事を教へられました。さうしてそのあげく、極寒にたつた一枚の煎餅蒲團で最も暖かく寝る法まで學んだのでした——これは私の幽閉せられた檻房の世話掛をしてゐたある囚人が教へてくれた事なのです。何しろ火の氣のない檻房の板間は凍るやうに冷たうございました。その中で支給せられた一枚ぎりの煎餅蒲團で極寒の夜を明さねばならなかつたのです。而も着てゐる薄い綿入の衣服はぬいでしまつて、木綿の肌着一枚になつてもぐり込む規則なのでした。もぐり

込むと云つても、蒲團は一枚きりなのですから柏餅になつて寝るのですが、いくら疲れてもさすがによく眠れませんでした。然しある日その檻房掛の囚人が私の窓口へやつて来てそつと教へてくれた寝方によると、成程暖かく寝る事が出来ました。私にこれを教へてくれた囚人は情婦を殺した罪で十年の刑に處せられ、それが恩典で七年に減せられ、それももう五年勤めあげて來た男なのです。天王寺中學に在籍した事もあると自分で話してゐました。さうしてどういふものかこの男は私をひごく尊敬をして『先生』とよんでゐました。

監獄の話なら私は可なり面白い材料をもつてゐます。麥と小石とで出來た、もつさう、飯の話、饅頭を喰ふ夢を每晚見た話、獄中のお正月の話、いつのまにか吃になつてゐた話、状袋はりをして貯金の趣味を覺えた話、そんな事をお話してゐたら限りのない事ですし、またさういふ事を書くのがこの文の目的ではなかつた筈です。私はある人々のやうに監獄へ入つた事を自慢にしたいくはありません。自慢どころか、私はそれを話せといはれたらひごく困ります。何故ならば、私の獄中生活はあまりに意氣地が

なかつたからです。さうして私のあさましさと弱さを無慘にさらけ出さなければならぬからです。

然し兎に角、私は、さうした人間生活の最後の生活まで経験して来たことによつて私の今日のこの傲慢無禮な信念は私の心にねぢ釘のやうに意地悪く根を喰ひこませてしまひました。それが私の將來にどんな幸福を齎すか、またどんな不幸を齎すか、私は今さういふ事を考へては居りません。私はたゞなりゆくがまゝに私の身體を運命の手になげ出してゆかうと思つてゐるだけです。

さもあらばあれ、私の唯今の生活は、この集のやうなものを作りあげる事によつて新らしい第一歩がふみ出されてゐるわけなのです。勿論それが作家とか藝術家とかいふやうな大それた生活ではありません——大體私はそんな生活があるものかないものかも知りません——唯私は今日、脚本製造業者として、演劇構案業者として今までとは全くちがつた新らしい生活に入つたわけなのです、その點で、私のこの集は、私の第二の出發點であり、同時に之れは過去の墓場であるわけなのです。だから私はこ

の集の内容が如何に貧弱であり如何に幼稚であるにしても、私自身にとつては私の生活の紀念碑として可なり貴いものに思つてゐます。この集が世の如何なる嘲罵を浴びるか、またどんな賞讃をうけるか——恐らくそんな氣づかひはありますまいが——といふやうな事は私にとつては全く無關係な事です。唯賣行が悪いと出版者の武藤氏にすまないと思つてゐるだけです。然しそれも武藤氏が好んで出させたのだから私の知つた事ではないかも知れません。

吉澤先生——

先生の學徒に私のやうな不眞面目な男が出来た事をお恥になつていふと思ひます。然し私はこの不眞面目を最も眞面目に行つてゐる男である事を申します。世の中を不眞面目に渡るといふ事は、眞面目に渡るよりも更に更にむつかしい事です。殊になま半可な、學問といふものゝ上つらをなでゝ見た人間にとつてはそれは可なり大きな苦痛を與へます。然し私は今日ではそれを苦痛と思はなくなつたまで墮落してしまひました。

私が先年あの問題をひき起した時、東京大學では卒業生名簿をくつて私の名を調べたさうです、さうしてそれが東大の出身でなかつた事を知つて安心したといふ事です——これは風説です、恐らく嘘でせう——京都大學は今日初めてその卒業生名簿をくつてよろしい。さうしてかういふ墮落した出身者のあることを見出して悲しんでいふと思ひます。

大正十一年八月

大西利夫拜識

露の蝶

(この脚本は私の處女作である。今から見ると、些か冷汗が出るが、然し私の生活の記念としては思ひ出の多い作である。幕切れのころは後に書き改めたので、上演した時の脚本とは少しちがつてゐる。)

場所——大阪新町、樋屋の太夫局

時代——文化文政の頃

時——五月雨のある日の灯ともし頃

登場人物——櫻木太夫、引船八ッ橋、幫間五八、倉橋勾當、川大盡、その他、花車、仲居、禿、

舞臺——正面舞臺の前方は廊下、下手は勝手へ通する處で杉戸がしまつてゐる。廊下の奥は少し高くなつて座敷になつてゐる。その奥は椽側を隔て、庭園の植込や燈籠が見える。その椽側は左右何れも他の別室へ通する。座敷の上手下手には黒塗御殿風の勾欄のついた中二階の座敷の一部が見える。階があつて

正面の座敷から何れの中二階へも上る事が出来る。

中二階の勾欄の下から奥の椽側へかけて數個の雪洞が立つてある。

しんみりとした琴の音で幕があく、舞臺は非常に暗い、雨の音が頻りにする。下手廊下の杉戸から禿甲、乙、火のついた手燭をもつて出て靜かに座敷を通つて奥の椽側の雪洞に灯をつけて廻る。同時に上下的の中二階から禿丙、丁同じく手燭の火を持つて出る、勾欄の下の雪洞に灯をつけてしまふと、丙はこの二階へ、丁は廊下の杉戸へ、甲と乙は椽側から左右に、何れも退場。

雪洞に火が入るに従て舞臺は漸次明るくなる。但しフットライトはつけない。また舞臺の中央だけが明るくて隅々は依然として暗い。最後に奥の庭の燈籠に火が入る。

上手の中二階から禿丙、戊が出て座敷へ下りる。二人とも美しい手毬をもつてゐる。

禿丙 さア、そんならこゝで撞きあひをしましやうわいなあ。
禿戊 負けしやんすなえ。

ト手毬をつく、下手杉戸から幫間五八登場、そつと来て二人を不意に邪魔する。

禿丙 あれ——まあ誰ぢやと思ふたら幫間の五八さん、何をしやしやんすのぢや。

五八 コレ何をしてゐる、もう肩あげも落しさうな年になつて、いつまで手毬をついて

ゐる。そんな事より男を手玉に取る稽古でもしやれ。

禿戊 あれいやらしい、すかん金かん頭あたまは藥罐。

五八 ナニ、こいつく俺の頭の事をいひくさるのぢやな。

ト禿を捕へにかゝる、禿きやつとにげる、この時上手中二階の障子があいて引船八つ橋が姿を出す。

八つ橋 あゝコレ何をしてゐるのぢや。

禿丙 それ見やしやんせいなあ。

禿戊 五八さんが悪い事ばかり——。

五八 やあ、これは誰かと思へば八つ橋さま、さてよう降る天氣でござります。

八つ橋 八つ橋さまではないわいな、お前一體どうしてゐやしやんす、此間太夫さまと川さんが、あんな悶着をさんしてから、ふつつりばつたり魷の道きりで、太夫様の御心配はどのやうぢやと思ふてゐる。お座敷も斷つて休んでゐやしやんすではないか、何ぼう川さんに附きりのお前でも、日頃から太夫さまに御ひいきになつてゐる御恩を思ふたら、取りなしの一つもするがあたり前、それを知らぬ顔で浮れてゐる

どはお前といふ人は一體何といふ人ぢや。

五八 これさ待つた〜、さう立てつゞけにやられては返事をするひまもござりませぬ。その儀について今日は川大盡のお使者でござります、役目の儀なれば御許しめされど、ずつと上座へ通るが順ぢやが、太夫様のお部屋へは盲人めくらの外は男氣おきけといふものは牡猫一疋出入罷りならぬ、どの堅い御法度を承知いたして、こゝに控へております。残念ながら頼みます故、こゝまで下りて下さりませ。

八つ橋 いらぬ事ばかりつべこべとよう喋る男ぢや。(ト下へ下りながら)何をいひに來たのやら、さア何ぢやえ(ト五八の傍に來る)

五八 さればサ、ごうせ今度の事は、昔から犬も喰はぬと相場のきまつた、お定りのいざごご故、野暮らしい取なしもへちまもいるものかと、實は私もタカを括つて見物してゐましたが、何がさて、瓢箪から駒が出たといはうか、徳利から牛が出たと申さうか、思の外の大真面目で、川大盡が頭から湯氣をたて、おいでなされます。

八つ橋 聞けば揚屋も今までの吉田屋をふつつりやめて、井筒屋から吉野太夫様を呼ば

し、さうな。

五八 さアそれが面あてと申すものでござります、一體こゝの櫻木太夫さまも聞えませぬ、何はういけもつれた悶着ぢやと申して、タカが口説くせつのもや〜ぢや、太夫さまから一ト筆しめしら、勘忍して下さんせあら〜かしくで納まる所を、今もつてうんだものがつぶれたとも、言ふて越さつしやれぬはこれいかに。

八つ橋 あほらしい、それはこつちのいふ事ぢやわいなア、太夫さまこそ川さんの優しいお手紙を待つてゐやしやんす。

五八 へん、さうやつてごつちからも意地ばつて待つてござつたら、この頃の雲行くもゆきではないが、いつ晴れるやら知れたものではござりませぬ。そこでこの五八様が、楠くすこのけ孔明糞くらへと言ふ一生の智恵をしぼつて書かして來たのが、コレ川大盡から太夫さまへの御玉章たまづさ(ト手紙を出す)何と御苦勞な事でござりましやうがな。

八つ橋 エ、そんなら川さんのお手紙を?、それは忝けない、ごうで細々こまかと優しいま心が書いてあるのであらう、太夫さまもこれを御覽なされたらどのやうにお喜びなさ

れよう。そなた早う持つてゆきや。(こ丙に渡す)

禿丙 あい／＼。(ト上手の中二階へ走つて入る)

八つ橋 そして五八さんはお返事を待つてゐるのであらうなあ。

五八 知れた事でござります。そのお返事貰ふて歸らねば今まで磨いた私の男が立ちませぬ。

八つ橋 ほ／＼、大さうな(禿丙の方へ)そんならそなた早う行て太夫さまにさう申しや。禿丙 あい／＼。(ト同じく上手の中二階へ走つて入る)

五八 そんなら八ツ橋さま私は勝手で待つて居ります。どうぞ早うお返事を。

八つ橋 わかつてゐるわいなア。

トその時杉戸から倉橋勾當仲居に手をひかれ、禿丁が袋に入れた三味線をもつて附添ふて出て来る。五八 勝手へゆかうとして、途端に危く勾當と鉢合せにならうとして。

五八 おつと危いこのまア盲さま……。(ト勾當を見て)やア是はほんまの盲様ぢやな。ハテ誰かが按摩でも呼ばしやつたかな。

倉橋 ナニ按摩ぢや？これ、ごこの和郎か知らぬが、おぬしも眼が見えぬか、按摩とは何ぢや、かう見えてもわしは立派な検校ぢや。

八つ橋 ナニ検校、ハテついぞ見なれぬ検校様ぢやな。

仲居 あいなア、いつもこの局へお出入の繼橋検校様は、今日はお差支があるごやらず。この検校さまが代りにおいでなされたのでござります。

五八 さてはさうでござりましたか、さうとは知らずに按摩なごとはとんだ失禮、これがほんまのあやま針の治療上下十六文。エ、又しても碌な口合が出居らぬテ、したが宵の口の今時分、検校様をよんで三味線ひかさうなごといふひまな太夫様はこの局にあらつしやりさうにも思へぬが、八ツ橋さま、櫻木様がおよびなされたのでござりますか。

仲居 違ふわいなあ、相生太夫様がこの頃御病氣でお休みなされてゐる故、お慰みにおよびなされたのぢや。

五八 ハテさうであつたか、私はまた櫻木さまがムシヤクシヤ腹のやけ遊びかと思ひま

した。

倉橋 何ぢや櫻木さま？櫻木さまも今夜は局においでなされるか、はてまア……。

五八 コレサ、櫻木さまと言ふと、何ぢややら、えらう氣になされますの。

倉橋 エ、いやナニ、はゝゝゝ何でもない。イヤ埒もない此盲目に、櫻木さまがごんなお方やら、見えやう筈もないのぢやが、常々から人の噂にもきいてゐる。新町きつての全盛で、お顔の美しさなら、お心の優しさなら、観音様の化身のやうなお方ぢやげな。あゝたつた一度でもよいお顔が見たいものぢやな。

五八 ところで見たうても見えぬ盲目様では、これがほんまの見ぬ戀と申すものでござりますな。

倉橋 さゝ、その盲目の見ぬ戀の心持は、そなたらのやうな眼のあいた者にはわかるまいな。

五八 大方暗闇へ家鳴あひるを放したやうなものでござりましたやう。

倉橋 エ、埒もない、そなた等に係つてゐては腹が立つ、さア仲居衆手びきをたのみま

せうぞ。

仲居 さアおいでなされませ。

ト倉橋、仲居、禿、下手の中二階へ入る。

五八 あはゝゝゝ。ドレそんなら私も勝手へ手引をたのみまじやう、八ッ橋さまおたのみ申しましたぞや。(ト退場)

八ッ橋 ホンにあの様な口の悪い男もないものぢや、ほゝゝゝ。それはよいが太夫様もあのお手紙で、嘸さぞやお心がとけたであらう……。

トゆかうとする時中二階から禿丙手紙をもつて走り出る。

禿丙 八ッ橋様、太夫様のお返事でござんす。

八ッ橋 おゝこれは早い事ぢや、五八さまは今勝手へ行た故早う持つてゆきや。
禿 あいゝゝ。(退場)

八ッ橋 やれゝゝこれで安心ぢや、太夫さまあれでもうお氣がさつぱりした事であらう
これ太夫さまに……。

トゆかうとするこ中二階から櫻木がふさいだ顔をして出て来るのにあふ。

八つ橋 おゝ太夫さままでござりまするか、川さまのお手紙で嘸まあお心がとけたでござりませう……。

櫻木は物も言はず階を下つて座敷へ入つて来る。禿皮が座蒲團や煙草盆などを運んで来る。

八つ橋 さアこゝで御一服召上りませ、(ト禿と共に櫻木の座をこさへながら)……まア御覽なされませ五月雨と申す物は鬱陶しい、いやなものでござりまするが、あのやうに庭に火が入つて、濡れた木の葉に色をうつしてゐる眺めはまた格別ではござりませぬか。

櫻木 ……………。

八つ橋 あれまア太夫様ごうなされたのでござります。今のお手紙でお心が解けませなんだか……太夫様……これはしたり、ハテごうなされたのでござります。お手紙に何ぞ氣のすまぬ事でも書いてあつたのでござりまするか。

櫻木 ……氣にすむもすまぬも……八つ橋、あの手紙は……愛想づかしの縁きり状ぢや(ト懐から手紙を出しやけに投げ出す)

八つ橋 エゝ愛想づかしの縁きり状、へえ——まあ——(あきれ)

櫻木 ——ホンに男心と秋の空とは、昔から言ひならはしてはあれど……川さんこそはそのやうなむら氣のないお方と、しんぞ頼もしう思ふてゐたに、あのやうな埒もない口説が基ですつぱりと、揚屋から太夫までかへて私へのあてつけ、夜も寝られず待ちこがれた便が、今宵になつてやうくあつたと思へば、あのまア何といふ愛想づかし……えゝ私やもう——。(ト涙をのむ)

八つ橋 あれまア太夫様……(ト一寸困つて) 太夫さま、あなたまアそのやうに本氣におなりなされて、傾城の勤めが一日もなりませうかいなあ。どうでこの廓へ来て、君傾城を買はうといふに、誰が本氣で来る男がござりませうやう、その日その夜の風次第に暮してゆかねば生命がいくつあつても足りませぬぞえ。

櫻木 あいなあ、私はもう諦めてゐる。もうくふつつり諦めた。あれ程頼うだ川さんさへあれぢやもの、あゝもう男には懲りたわいなあ。

八つ橋 ほゝ……さりとてはまた思切りのよい事を仰ります、シテ川さんへのお返事は何

となされたました。

櫻木 私ぢやこて愛想づかしを書いたわいなあ。

八橋 エ、愛想づかし？それはまた餘りな……。そのやうになさらずとも、ちつこは甘い事も書いて下から出さへすれば、男はいつでも歸つて來るものでござりますぞえ。

櫻木 歸るも歸らぬも所詮は男の氣のむくまぢや、ごうで男のむら氣次第に、可愛がられたり棄てられたり、玩弄物になつて暮すより詮のない流れの身、あゝはかない事ぢやなあ——。

トふさぎ込む時、下手の中二階から三味線の音が聞える。

地唄露の蝶、世の中を何にたこへむあすか川、きのふの淵は今

日の瀬こ、かはりやすさよ人心、今は合

櫻木 あれごこでやら私の身の上を弾いてゐる。

八橋 あれば相生太夫さまが檢校をおよびなれてゐるのでござります。

この身にあいそこそも、つき！

さ糸の切れた音して唄やむ

櫻木 あれ糸がきれた。

八つ橋 エ、まア縁起の悪い、太夫様のお部屋へ來て弾く三味に、糸を切らすといふ事がありますかいの、うつけな檢校ぢや。

トこの時下手の中二階の障子があいて倉橋勾當、仲居、禿ばたくとおひる。

倉橋 ごうぞ、御免下さりませ、あやまちでござります、おゆるし下さりませ。

仲居 えくになりませぬわいなあ、繼橋様にいふてやる程に早う歸らしやんせ。

倉橋 それを繼橋に申されましては……。

禿 なりませぬわいなあ、さあ去んで下さんせ。

櫻木 あれ、何をやかましよういふてゐやるのぢや。

仲居 おく、太夫様そこにござりましたか、おやかましよう申しましてすみませぬ、まあ聞いて下さりませ。いつもお越の繼橋様の代りぢやといふて、今日始めて來たこの

檢校があらう事があるまい事か、弾いてゐる最中に三味の絲をきつたのでござります。

八つ橋 ホンにこなたは何といふお方でござんす。太夫様のお部屋では何によらず切れるといふ事は縁起を祝ふてきつい禁物、三味線をひくにも一べんづゝ新らしい絲をかけかへるのが式たりでござんすぞえ、それをこなたが糸を切つては、とても申しわけがあるまいぞえ。

倉橋 それは申しわけがございませぬが、何分勝手のわからぬ……

仲居 えゝ何ぼう勝手がわからぬといふて、繼橋さまの代りに來うといふ程の檢校ならそれ位の事心得ではなりませんぬ、そのやうな檢校を、代りに出した繼橋様も繼橋様こりやきつう申さねばなりませんぬ。

倉橋 ち、一寸まつて下さりませ、それを仰つて下されては私が立ちませぬ。何をかくしませう私は繼橋檢校の弟子で、倉橋と名乗る、まだ檢校にもならぬ勾當でござります。何でも修業して檢校まで上らねばならぬと藝を磨いてゐる私、やうく

この頭師匠の代りも勤める程になりましたに、今それを申されては、檢校になるどころか師匠の顔をつぶしたかごで、勾當まで取りあげられる事でござります。どうぞおゆるし下さりませ。

仲居 お前の事は知らぬ、お前の都合のよいやうにしてゐては、こちらの太夫さまが立ちませぬわいな、さあ去なしやんせ。

櫻木 あれ待ちや、そのやうに言やる事はない、タカが三味線の糸、きれたとやらされぬとやらで勾當様の行末までなうするのは餘り無慈悲ぢや。

仲居 さればといふて昔からこの局の殿しい掟になつてゐるものを……

櫻木 よいわいの、何ば縁起を祝ふて見たところで、切れるものなら何として切れるたどひ女がどのやうに思ふてゐようとて男がそれを構ふてゐやらうか諦めやいの。禿それでもこちの太夫さまの御機嫌がきつう悪うござんすぞえ。

櫻木 はてよいわいの、まこと機嫌が悪ければ私がのちに行てよういふて進せるほごに勾當さまの事は私に預けて置いてたも。

仲居 あい……外ならぬ太夫様がさう仰つて下さります事なら、たつてとも申しますまい、相生太夫様には私からよいやうに申しませう。

櫻木 頼んだぞえ、

仲居 そんなら御免なされませ。

ト仲居と禿はもこの中二階へ入る

倉橋 太夫様あり難うございました、私は助かりました、あり難うござります〜。

櫻木 そのやうに、いはしやんす事はない、このやうな所の勝手、御存じないのも無理ない事ぢや、心配せずさよいわいなあ。

倉橋 ホンに何といふ情なまけふかい太夫さまであらう、あのまア物静かな物の仰りやう、お聲の涼しさ、え〜これ、そこらにござる女中衆、太夫様は嘸まあ美しいお方であらうなあ。

八つ橋 あれ何を言はしやんす、美しいのは知れた事、それさい前ぜんお前まへが尋ねてゐやしやんした櫻木太夫様ぢやわいなあ。

倉橋 エツ櫻木様、あのそんならこれが……あのこれが、櫻木……はア眼がほしい〜
(ト泣き出す)

櫻木 ごうしやしやんした、私の名をきいて眼がほしいと言はしやんすのは……。

倉橋 見たうござります〜太夫さま、たつた一目あなたのお顔が見たうござります。

櫻木 あれまア……

倉橋 笑ふて下さりますな、樋屋の櫻木さまと云へば、人の噂にもきいて日頃からあこがれて居りましたものを、そのお方の目の前へ出ながら、見る事も叶はぬこの私、え〜まあ何といふ因果者でござります。

櫻木 あの勾當様のいはしやんす事わいな、そのやうにいはれると私や耻しいわいな、
倉橋 わ〜まア何といふしほらしい事をいはしやるのぢや、きいたにまさるお情深い太夫様……あ〜私はもう……太夫様に生命いのちがけでほれました——。

櫻木 あ、これ、何をいはしやんすのぢや、盲目さまのくせに、そんな及びもつかぬ事はいはぬものぢや。

倉橋 エ、及びもつかぬ？成程なア、對手は全盛の太夫様、わしら風情に及びもつかぬはわかつてゐるが、さりさてまた諦められぬのが、戀といふものでござりませう。

櫻木 勾當さま、嬉しい事をいふて下さんですが、あくもうそんな言はきくあいた、男心といふものは、熱い時には生命がけでも、冷めたら埒もないものぢや。

倉橋 め、滅相もない事仰りませ、それは眼のあいた男のことでござります。物心覺えてこの方、夜とも晝ともつかぬ暗闇の中で、手ざはりさあて推量で生甲斐もなう生きてゐるこの盲目が、この冷たい世界から明るい世界へ手びきして貰へるものは温かい情の綱より外にござりませぬ。ほんにそれこそ盲目にとつては命の綱、つかんだが最後離しはせぬ、身を焼きつくしても冷める時はござりませぬ、太夫様、御推量下されませ……と申したところで、あくやつぱり及びぬ戀かいなあ……。

櫻木 ほんにいちらしい勾當さま、あついお志嬉しうござんすぞね。さう切なう思はしやんす事はない、私は賣物の傾城、金さへ出せば身請けなりと何なりと、お前の自

由になる身體、心を大きう持たしやんせ。

倉橋 エ、金さへ出せば身請けなりと……あのわしらのやうな盲目にでも……それはまアほんまの事でござりますか。

櫻木 嘘もほんまもない勤めの女でござんす。(ト前に投げ出した手紙を拾つてよんでゐる)

倉橋 シテその身請の金といふは何程でございます。

櫻木 ほ……おかしい事を聞かしやんす。大枚千両ぢや。

倉橋 エ、千両——へね——あくとも及ばぬ金ぢやが——いや待てよ、萬更及びぬわけでもないぞよ。檢校になる料に、今日まで大切に置いていたあの金、あく、あれさへなうすりや……、太夫様そんなら千両の金さへ持つて來たら、きつと身請をせられて下さりますか。

櫻木 (手紙に目を落して氣のない調子で) 待つてゐますわいなあ。

倉橋 待つてゐるとく、わく忝けない、太夫様きつとでござりますぞね、約束しましたぞや。

櫻木 あれまア一寸待たしやんせ、お前はまあそれを本氣でゐやしやんすのかわ。

倉橋 これが本氣でなうて何とするのぢや。千両で私の生命の綱が拾へるのではないか
暗闇が一ぺんに明るうなるではないか、檢校が何ぢや位が何ぢや、わゝ私はもう……
こんな嬉しい事はない。

八つ橋 ほゝゝ何をいふてゐるのぢや。あれは皆おごけぢやわわいな。この引手あまたの太夫さまが何を好んでお前のやうな盲目様の杖の代りになりゆかしやれよう
あたら御容姿ごようざうが棄すたるわいなあ。

倉橋 何、容姿きりやう?はゝ、そんなものが何ぢや。美しいのは東の間、今に肌もあれやう皺もよらう。棄すたるの棄すたらぬといふて、夢の間まほどのはかない色香に、いつまで未練をのこしてござるやうな太夫様ではない、なあ太夫様。

櫻木 エ〇(ト困る)

八つ橋 ほゝ、おかしやんせ、さういふお前でも太夫さまの美しい噂をきかねばほれも
すまい、さすればお前も眼には見ぬながらも、心に描いてござる太夫さまの若い

美しいお姿に迷ふてござるのではないか。それ程貴い女の色香に、たとひはかないものにもせよ、暫くの未練をのこさいでならうかいなア。

八つ橋 これ何をいはしやる、眼あきが見る色香と盲目の見る色香とはものがちがひますぞや。眼あきが見る色香は、赤は赤、青は青と、たゞありのまゝの美しさぢやが盲目が心で見ると色香はそんなものではない。眼あきが赤と見る色も盲目は青ぢやと見るかも知れぬ。そのかはりには眼あきが美しくないといふものでも、盲目は美しいと思へば美しい、櫻木太夫さまぢやとて美しいとは人の噂に高いお方なれど、私
が心に描いてゐる太夫様の美さに較べたら何でもないかも知れぬ。

櫻木 あれ何をいはんすのぢや。

この間に櫻木はだん／＼倉橋の言葉にひきつけられて傾聴してしまふ。

倉橋 さアそこぢやわいの、目あきの美しさは年がたてば色もあせようし香もうせよう
なれど盲目にはそのうつろひが見ぬ代かわりには、永劫じんみらい盡未來じんみらいいつも若々しい美しさだけ
けがのこりますぞや。なあ太夫さま、あなたはまあその目あきのはかない色香にいつ

までも未練をのこして、永劫うつろはぬ色香に生きる心はないと仰りますか……。
櫻木……(やがて決然として) 勾當さま私はもう心を決めました、早う身請をして下さ
せ。

八つ橋 エツ、太夫様あなたはまア何といふ事を……。

櫻木 私はもう勾當様のいはしやんす目あきの色戀はしみぐいやになつた。
八つ橋 エ、

櫻木 あれだけ深うなつた川さんでさへ、あんな埒もない事から縁がきれるではない
か。まして他の目あきの男が惚れたの戀したのといひよつて来る心にごれだけの誠
がある事やら、所詮は私が束の間のこの若い色香に眼をこめて、甘い蜜に吸ひに來
る蝶々ぢや。あゝそんなものは勾當さんの切ない心をきいてから急に未練がなうな
つた。

倉橋 ねえまアよう仰つて下さりました。そのお心をきいては一刻もじつとして居れぬ
そんならこれから金の都合をして来る、さ、そんなら早う、これさ、誰ぞ私の手を

取つて下され……。

八つ橋 エ、まあ待たしやんせ、此太夫様の身請が、さうやすくと出来るものかい
なあ。

倉橋 愚圖々々いはしやれな、金さへあれば文句はない事ぢや。さあ早う誰ぞ手引して
……。

トあせる時杉戸の方でぱたくと騒しい音がして川大盡が勢こんで飛び出す、幫間五八、華車まん、仲
居さめながら出る。

川 エ、放せ〜。

まん これはまた何ごした無體むたいをなされます。男の出入はきつい法度になつてゐる太夫
様の部屋へ、行きなりに押入らうとはあなたはまあ何と言ふ無體を……。

川 ねえ無體も厄體もあるものか、太夫に用があるのぢや。

まん 太夫様に用があるなら何で揚屋からおよびなされませぬ。

仲居 お部屋へ通すことはなりませんな。

川 わふやかましい、そこのけ!

ト突き飛ばして行かうさして櫻木を見て。

川 おくそちは!

櫻木 誰かと思ふたら川さん、何用あつてこゝへござんした。

川 何用あつて? わふ、おのれごこまでも俺を馬鹿にしやうといふのぢやな。

櫻木 エゝ何ぢやいなア、人を馬鹿にするとはお前の事、ようも私に毒性なあてつけをして下さんした。

川 ヤイ、當つけとは何が當つけ、あれ程の口説くごつの別れが氣にもならぬかして、文ぶんはおろか便りもおこさず、ごうでもよいと言はぬばかり、それにまだ足らないで、此愛想づかしは何ぢや。

ト手紙を櫻木になげつける。

櫻木 それはわしのいふ事ぢやわいな、便りをせぬはお前の事、愛想づかしもお前からお互ちやわいな。

川 ナニお互ちやと……お互ちやと……そちの情なさけはそんな勘定づくの情ぢやの。
櫻木 アイ、私は傾城でござんす。

川 おのれ!(ト飛びかゝらうとする)

仲居、花車 替間口々に あれ! おまちなされませ! 待つた〜!

川 エゝ腹の立つ、放せ、放さぬか!

ト脇差を抜くので皆驚いて身をひいたが、やがてまた立ちかゝつて川大盡の手を押へてしまふ。

櫻木 川さん、お前私を斬らしやんす氣か。

川 おく斬る、突く、なぶり殺しにしても飽き足らぬにくい奴!

櫻木 エゝそれは餘り未練といふものぢや、一旦きれたと立派にいふて置きながら、男らしうもない事さしやんすな。

川 おく、おれは男らしうもない、未練者ぢや、おくおれは太夫に未練があるのぢや、もつと言はうか、おれは太夫が諦らめられぬのぢや。

まん それ程未練があるなら、なせ切れたといはしやんした。

川 エゝ何をぬかすのぢや、切れたといふのも痴話、憎いといふのも口説、斯うした
らあゝもするか、あゝしたらかうもするかと、思はせぶりなあた事も、太夫にはわ
からぬか、情は知らぬか、こつちからきつい文を出せば、あつちからも愛想づか
し。

五八 えゝそんな持つて廻つたむつかしい事を仰つてはごうもなりませぬわい。廓の色
戀といふものは、そんなお姫様が附け文する様な事は通用しませぬ、惚れたら惚れ
た、いやならいや、すつぱりとした悪氣のないのが粹と申すものでござります。

川 おのれらのやうな浮氣な情の外に何も知らぬ奴に眞の情がわかるものか、おれは
そちらの知らぬ眞の情で太夫に打込んだ、太夫も亦わしに勤氣はなれて打込んでゐ
ると思ふた、それが皆嘘であつたのぢや、私は欺されてゐたのぢや。

櫻木 川さん、何をいはしやんす、私が欺した嘘をついたとは何をつかまへて……。

川 エゝぬかすなく、俺がすねたらおのれもすねる、強ういふたら強う返す、えゝ
コレ、眞の情といふものはそんなものではないぞよ、そりやまア俺も無理もうはう

し氣儘もいはう、それが何ぢや、それがどうしたのぢや、甘えた子供が何ほ無理い
ふても我儘しても、産みの母なら腹は立てまい、他人の子なら打たゝきする程の事
まですかしたりなだめたり、機嫌をとつていごひはすまい、母と子、男と女と、縁
こそかはれ心の情に變りはない筈、それを眞の情といふのぢや、おゝ俺はそなたに
甘えたのぢや、子供が母の慈悲に甘えるやうに、そなたの心の情に甘えたのぢやが
あゝ、わしはやつぱりそちの産みの子ではなかつた、他所の人であつたのぢや、そ
れとは知らずに今までわしが、この魂まで打ち込んでゐたかと思へば……えゝ腹
の立つ！。

トまた立ちかゝるのを皆々押へつける。

川 エゝ放せ、放せ、心の變つた女。ひと思ひに殺してくれ！。

八つ橋 人を殺めたらお前もそのまゝにすみませぬぞえ。

川 そんな事は承知の上ぢや、今日が今日まで魂を打込んだ女に遁げられて、どうし
てこのまゝ生きてゐられやう。

櫻木 川さん、私の心が變つたらお前は生きてゐやせんせぬかえ。

川 俺はもとよりおのれも生かしては置かぬ。

櫻木 嬉しうござんす、川さん勘忍して下さんせ。

川 な、何ぢや、勘忍してくれとは今になつてそぢは……。

櫻木 アイなあ、私は今までお前を恨んでゐた。さうしたお心とは知らなんだわいなア。
川 ナニ！。

櫻木 さうこは知らずに、唯もうお前の心が變つたさばつかり思ひつめてゐたのでござんす。そりや私から文も便もせなんだは悪うござんしたが、揚屋から太夫まで替へてこれ見よがしの當つけを、聞いた時の悲しさ悔しさ、何ぼう眞の情があるといふて、是が腹を立てずに居られようかいなア。

八つ橋 ホンに太夫様は、あれからさといふものは夜もおちくお寝みなされず、喰べるものも召しあがらず、店も斷つて休んでゐやせんす、ちつとは察しておあげなされませいなア。

川 ナニ、またそんな口先ばかりの嘘をばぬかして……。

まん あれマア何の嘘でござりませう、ないしやう内所でもごの様に心配してゐた事か知れませぬぞえ。

川 それはこつちも同じ事ぢや、櫻木の心が變つたさばかり思ひつめて、ごの位け自棄な心になつてゐたか……コレ櫻木、そなたやつぱり心は變つては居ぬのぢやな。

櫻木 何の私がかへませう、お前こそお心は……。

川 變つてゐる位ならこの様に……。

五八 オツともう置かしやりませ、そこまで聞いたら、あさは聞かいても見いでも、い経緯は見とほし、大方こんな幕ぢやと思ふてゐた、へんあほらしい。

まん ほろろ何の事ぢやいなア、逢ふて話をなされたらわかる事を、こんな危いものをふりまはして……(ト川大盡の刀をさり鞘に納めて下に置きながら) 埒もないこんないさかひする隙に、ちつとは眞味に、それ、此間から仰つてゐる身請の相談などなさりませいなあ。

川ナニ、心さへ解けたら何でも無い、直にも身請はするつもりぢや。
五八こいつはまた風の變りやうが早過ぎる。シタがこんな風は早いがいさうな、何
かの事は揚屋でしつぱりと、さあ太夫様もお支度なさりませ。

この時倉橋勾當前へ出る

倉橋 コレ待たしやれ、太夫様の身請はこつちに先約があるのぢや。
皆エツ〇(ト驚き)

川ナニ、是は見知らぬ座頭の坊、身請の先約とは何をいふのぢや。

倉橋 私は太夫様とチャンと約束をすました。なア太夫様、さい前私に仰つた事、よも
やお忘れはなされませまいな。

川ナニよもや忘れぬとは、コレ櫻木そなたそんな約束をしやつたのか。

櫻木 エ、さア……それは……それはその……あの何ぢやわいなア。さい前私がお前の
事を思ひ出して、頼み難ない男の心を、つくつく味きなう思ふてゐる矢先、この勾
當様が真心をうちあけさんす故、つかつかその氣にもなつたが……。

倉橋 え、それは聞えぬ、太夫様、あれ程まで心をこめた私の言葉を、つかつか
うかどは何の事ぢや。え、おぬしはわしをなぶつてゐたのぢやなア。

櫻木 あれさういふ事ではなけれど……。

倉橋 そんならごうぢや、目あきの戀はいやになつたといはしやれなんだか、束の
間の花の色による蝶々はいやぢやといはしやれなんだか、今の先さういふた口の下
から、もうそのやうな……。

櫻木 勾當さま、勘忍して下さんせ、私はやつぱり未練が出て來たわいなあ。

倉橋 ナニ未練？

櫻木 あいなア、切れたと思ふた川さんの心は元の儘と知れては、つれないと思ふた目
あきの戀にも、まだ諦められぬ頼母しさがあるやうな。

倉橋 それが迷といふものぢや。花がしぼんだから見むきもせぬ蝶々でも、蜜をすひに
來るときだけは眞の心になつてゐますぞよ。そのやうな一時の事にお前はまた欺さ
れてござるのぢやな。

五八 ハテ、欺されたと思ふておいでなさりませ。だまされて来てまことなり初櫻、蝶々になびいたおかげでやがて花がしぼんだら、ソレよい實を結びますわ。

川 はくく、よい事をいひおつた、成程戀ぢや花ぢやは一時の人の眼をくります大きな嘘ぢや。さめてしまふに不思議はないが、そんなものは早うさめてしまへ、やがてその嘘から真といふ情の實が結ぶと、年がよらうが腰が曲らうが、死んでも離れられぬ絆になるのぢや。

倉橋 目あきといふものは何といふ淺さましいものぢや、盲目の戀にはさめるといふ事がないぞよ。さア太夫様、目あきの戀と盲目の戀とごつちをおとりなされる、さア太夫様、いふて下さりませ。

櫻木 勾當さま私や矢張り……。

倉橋 俺に身請せられると仰りますか。

櫻木 私ハ川さんの言はしやんした、真とやらの實が結びたい……。

倉橋 エツそんならやつぱり私を見捨てるのぢやな。

櫻木 あれさういふ事では……。

倉橋 ええ云はしやれなく、今になつて見捨るとは何といふ胴慾ぢや、盲目と思ふてようもく、廻りやつたなあ。

八つ橋 あれ、何をいはしやんす、太夫様と川さんの仲は昨日や今日の仲ではない程に今お前が何と云はしやんしてもあかぬ事ぢやわいなあ。

倉橋 そんなら何故初めから……。

櫻木 ぢやといふてその時は……。

倉橋 ええいひわけは聞かぬ廻つたのぢやなく、廻つたといふて廻られてゐようか、何といはしやつた、私は賣物の傾城、金さへ出せばどうでもなると云はなんだか、賣物なら買ふて見せよう。俺の小判は通用せぬ法はなからう、ヨシ是から金を取つて来る、もうかうなつたら意地づくぢや。

ト立たうとする

まん コレサ何を云はしやんす、何ばう金を出した所で、身請をするには廓の式たりと

いふものがござんすぞえ。

五八 先づ初會から裏壁三回目と、馴染重ねてその上の相談づく、さう容易うはなりませぬわえ。

倉橋 そんなく、毒性的事があるものかいなあ……(ト泣き出す) この冷たい暗い盲目の心を一旦明るい所へ出して置きながら、今更そんな事いふて、元の暗闇の奈落へ突落すとは、餘りぢやく、私はもう……

五八 これさそんな駄々を言はずと、ちと自分の事も思ふて見るがよい、人並に言はれぬ盲目様が、全盛の太夫様に惚れるとはチト大それてゐる。

倉橋 それは知つてゐる、知つてゐる故諦めてゐた。それがあの太夫様の優しい言葉を眞にうけて、一寸……一寸の間浮み出た明るい世界が……あゝそれが忘れられぬ……。

八つ橋 そんな事を云はしやんしても仕様のない事ではないか。

倉橋 仕様がなないといふて、もうくもとのあの暗い世界へ歸るのはいやぢや、おゝ、

あの様な暗い冷たい所へ……わしはいやぢやく。(ト泣く)

川 あゝ、これはどうにもならぬ、これ櫻木、そなた何ぞよいやうに言ふてやりやいの。

櫻木 あいなあ、けれど思へば私が悪うござんした、今更何といふてよいやら……。

五八 ハテはふてお置きなされませ。かやうな事に係つてゐては、いつまでたつても限がござりませぬ、それよりもこの仕末は迷惑ながら、花車様や仲居衆にお頼み申して川大盡も太夫様も、兎も角揚屋へおいでなされたら如何でござります。

まん 成程それがよろしうござりませう。あとはわたしがよいやうに致しませうわいなあ。

川 さうか、それでは氣の毒ながらよろしう頼みます、太夫、早う支度しやいわし等先へ行って待つてゐるぞよ。

櫻木 あい……けれど勾當さんの事が……。

五八 ハテよろしいではござりませぬか、そんならおまん様、盲目様のご事はよろしう

頼みましたぞや、さア大盡。

川では參らう、太夫早う來やれ……。

ト五八、川大盡、仲居退場。

八つ橋 太夫様、そんならあなたも早うお支度を。

櫻木 あい……勾當さま、私が悪うござんした勘忍して下さい。

倉橋 太夫様、そんならお前さまは、ごうでも私を……。

まん あれ、まだいふてゐやしやんすのかいな、叶はぬ事ぢやあきらめしやんせいなア。

倉橋 はい……(ト泣き沈む)

八つ橋 さア太夫様、早うお部屋へおいでなさりませぬか、遅うなつたらまた川さんの御機嫌が悪うなりますぞえ、さア、早うお支度なされませ。

ト勾當に心をのこしてゐる櫻木をせき立て、兩人退場。

まん これ〳〵勾當様、そのやうに泣かしやんすものではない。物は思ひやう一つ、成

程お前には氣の毒なれど、さうした身に生れて來さんしたが因果といふものぢや、きれいさつぱりと諦めさんせ。

倉橋 はい……でも……でも私は……。

まん はてよいわいなア、私がどつくり得心のゆくやうに話をしてあげる程にともあれあつちへ行く事にせう、こゝは太夫様の部屋近くで長居は無用ぢや。さア立たしやんせ、三味線も私がつてあげやう、さア手を出さんせ、はて何ぢやいなアそのやうに弱々しうさしやんすことはない、さア行きませう。

ト無理に勾當の手をさり引立てる勾當はほろゝ立ち上り一足あるかうさして物に躓き倒れかゝる。

まん あれ危い！おゝこれは危い川さんが脇差を忘れてゆかしやんしたのぢやな、えゝこんなものを忘れてもよいものぢやが、あとで届けてあげやう、さア行きませう。

倉橋 はい……。

ト倉橋勾當まんの手にかかれしほろゝさして杉戸の方へ二三歩ゆく。

倉橋 あ、一寸物を忘れまして……

まんエ、何を忘れしやんしたのぢやえ。

倉橋はい、あの、さつき相生太夫様のお部屋へ撥を忘れて来ましたが……

まん ナニ撥を忘れた、よいわいな、それならわしがとつて来てあげやう、お前そんならここで待つてゐやしやんせ。

倉橋 はいごうぞおたのみ申します。

まん ちき持つて来てあげるぞえ、待つてゐやしやんせ。

トまん三味線と脇差を下に置き、勾當を獨りのこして下手の部屋へ退場、あそこで倉橋勾當はまんの去つてゆく足音に頻りに聞耳を立て、ゐたが、まんが相生太夫の部屋に入つた音をきくと、すぐ手さぐりで傍の脇差をさりあげる、さうして抜くより早く無難作に咽喉へつきたてる、うめき聲一つ立てる事もなしにばつたり倒れる。

(幕)

「大正九年六月大阪中座上演」

祇園精舎

第一場

場所——祇園の山内

時代——白河法王の朝

時——梅雨期の夕方

登場人物——平忠盛、高師親、伊東兼綱、大江忠頼、源高長、藤原秀世、

祇園の僧圓觀、その弟子専念、侍女淺茅、舍人行盛、その

他通行人男女

舞臺——上手、下手、花道、皆通路になつてゐる。雨の音の中に幕があく、男女老若三々五々足早に往來してゐる。

商人態の男 雨はやみましたすがまだ晴れさうにもございませんな。

そのつれの男 まだ雷がなりませんから梅雨はあけてゐないのでせう。毎日々々陰氣な事でございますな。

中年の女 早くお歩きなさい。もう日が暮れるぢやありませんか、私何だか氣味がわるい。

その妹らしき女 毎晩この山内に妖怪が出るといふのは眞實でせうか。

中年の女 いやだ、そんな事をこゝで言ふのは——さうでなくても氣味が悪いのに……

職人風の男 誰かその妖怪を見た者があるのかな。

そのつれの男 それは知らないが何しろ専らの評判だぞ。

職人 氣味が悪いなア、俺たちはかうして朝ばんに通らなければならぬのに、そんなものに出られてはたまらない。

つれの男 明日から他の道を通らうぢやないか。

職人でも、他の道といつて五條坂の方から廻つたら大變だせ。

つれの男 さうだなア。

ト往來の人々が口々に云ふ、上手から登場の祇園僧房に仕へてゐる中年の僧圓觀と下手から登場の禁裏北面の武士高師親とが出會ふ。

師親 やあ圓觀どの。

圓觀 これは高師親どのでござりましたか、ごこへいらつしやるのでございます。

師親 ちやうどいゝ所でお目にかゝりました。實はこれからあなたを僧房へお訪ね致さうと思つて來た所です。

圓觀 それはいゝ所でございました。何か御用があるのでございますか。

師親 他の事ではございませぬが、近頃洛中で評判致すこの山内に毎夜あらはれるといふ妖怪の事について伺ひにまゐつた。

圓觀 イヤ、その妖怪の事に就ては私どもも、すつかりなやまされてゐるのでございます。

師親 あなたはそれを確に御覽なされたのですか。

圓觀 見たところではございません昨夜私はもう腰がぬけてしまつて、僧房へ這つて歸つたやうな始末で——あ、今思ひ出しても怖ろしい。

師親 では、やつぱり事實なのですな。實は、我々の同僚四五人が寄集つて一度胸だめしにその妖怪を退治しやうといふ相談が出来上りましてな、——

この中に通行人二三、立ちよつてこの話を聞いてゐる。

圓觀 結構でございますな、あなた方の手でそれを退治していただければ、私共も大助かりでございます。何しろさういふ噂が立ちますだけでも山内の衰微になる事でございますから、是非一つ御盡力が願ひたうございます。

師親 それで、實は同僚の者があとから參るのですが、それに先立つてあなたに、その妖怪の出る時刻や、又妖怪の形かつ、こうなどを承はつてをきたいと存じて手前が一足先へ參つたわけです。

圓觀 でございますか、お話しする段ではございませぬ、私の方から御ねがひしても聞いて頂きたい事でございます、では兎もあれ僧房までお供致しませう。おつれの方

も僧房の方へお越しになる事でございませうな。

師親 無論、そこで待合す事になつて居ります。

圓觀 それは都合がいゝ、それではあちらでお話しを致しませう。

ト兩人つれ立つて、上手へ去つてしまふ、きいてゐた通行人も何かさゝやき合ひながら上手へ去つてし

まふ、この時向ふから若僧の専念手に破籠わりこを提げ急ぎ足で出て来る、その後から少しへだて、少女早苗が走つて出る。

早苗 専念さん、専念さん、あれ専念さんと云つてゐるのに。

専念 ねーお、早苗さんですか。

早苗 早苗さんですか、ではありませんよ。先刻からあんなによんでゐるのにきこへなかつたの。

専念 あゝ貴方あなたでしたか、先刻から耳の底の方で誰かゝ私の名を呼んでゐるやうな氣がしてゐましたが、私はあれは皆心の迷ひだと思つてゐました。

早苗 心の迷？あなたも随分ねえ……。(ト少し憤々ぶりぐする)

専念 イヤ、さうぢやありません。もう何だか私怖くて仕様がなのです、今日兄弟子の圓觀さんに、この祇園様の境内に妖怪が出る話をきいたんです。尤も前からちよい／＼噂のあつた事は、あなたとつて知つてるでせう。私實は噂だけでも怖かつたんですが……：：：：：けれどその噂はお寺の外だけの噂で、肝腎この境内に住んでゐるお寺の者は誰もほんとうに見たものはないといふし、半分嘘だらうとは思つてゐたのですが、それを圓觀さんがどう／＼昨夜ほんとうに見たんです。

早苗 まあ、圓觀さんがほんとうに見たんだつて——で一體お妖まじといふのはどんな形をしてゐるの。

専念 何でも銀の針金のやうな髪をふり亂した鬼婆なんですつて——

早苗 鬼婆——まあ——

専念 で、私はもうその話をきいてから恐くて／＼——それにこんな薄氣味の悪い夕方に使に行くのでせう。何か出なければいゝがと思つて恐々歩いてゐると、誰かと専念専念と呼ぶでせう。私はまたお妖の鬼婆が呼んでゐるのだと思つて……：

早苗 あら、私が鬼婆ですつて？

専念 でも私は知らなかつたのですもの——勘忍して下さい、——ね、勘忍して下さい——ほんとうに私は氣味が悪い——私何だか、夜はんにあなたに會ひにゆくのも怖いやうな氣がするのです——

早苗 えゝ、夜にあひにゆくのも怖い——専念さん、そんならあなたはもう私と會ふのを止さうといふの。

専念 いゝえ、そんなわけではありません。けど、お妖が出て来る時刻をきいて見るとちやうど私たちがあの繪馬堂で會つてる時刻らしいのです。無氣味ぢやありませんか。もしお妖にでも出會つて御覽——あなたは怖くはありませんか——

早苗 ——あたしは怖くはないわ——あなたに會ひに行くのだと思つたら、お妖だつて何だつて怖いものはありやしないわ。私あなたのためには今日までに随分怖い目をしてゐるわ、今だつてさうだわ。家で針仕事をしてゐただけで、ちやうど今時分はあなたがいつもの通り、町へお豆腐を買ひに行く時分だと思ふと急にあひたくな

つて、家をぬけ出してあなたを道で待つてゐたんだわ。家では私がゐないのでごんなに心配してゐるか知れやしない。

専念 すみませんねえ、ほんとうに——けど私は怖いんですよ。何しろ私は僧侶ですからねえ、僧侶の身であるまじいあなたと毎晩あいびきをしてゐるのでせう。佛さまのお罰で私も私はお妖に喰ひ殺されるかも知れない。

早苗 そんなに罰が怖いならあなた坊さんをよしたらいいのだから、雑作もない事だわ。専念 馬鹿な。そんな無雑作にゆくものですか。

早苗 あら何故、あなたのその綺麗な頭に毛をはやしたらそれでいいのぢやないの。専念 ……………

早苗 あゝわかつた、あゝわかつてよ。あなたはきつとさうだわ、あなた私ともういやになつたんでせう。

専念 えゝそんな事はありはしません、私は決して…………

早苗 いゝえ、屹度さうだわゝさうでなくてそんなにお妖を怖がる事はないわ。あな

たが殺されるのだつたら、私だつて殺されるのだわ。二人一しよに死ぬのなら殺されてもいゝんぢやないの、それにあなたは——あなたは——(泣く)

専念 いゝえ、あなたは邪推してはいけません、私は決してそんなつもりでいつたのぢやありません。私は…………

早苗 ぢやあ、あなたはやつぱりいつものやうに會ひに来て下さる?

専念 えゝ、ゆきますよゝ。だが…………いくら何でもいつもの所はごうも氣味が悪いですな…………いつそ今夜から會ふ場所をかへやうではありませんか。

早苗 それならいゝわ。ぢやどこにしませう。

専念 さうですなえ…………と云つて町へ出るのも工合が悪いし、境内ぢやごも無氣味な所ばかりだし…………それにこの雨模様だど——ほんとうにいつもの繪馬堂みたいないゝ所はありやしない…………

早苗 さうねえ…………

ト兩人小首をかたげてゐたが突然専念は頓狂な聲で叫び出した

専念 あゝいけない／＼、むかうから圓觀さんが来た大變／＼。

ト逃げ出すのを早苗よりついて

早苗 ちよいと、あなたどこへゆくのか、今の話はごうきめるつもりなの。

専念 まア、夫れは後でゆつくり考へませう。圓觀様に見つかったら大變です、あなたも早くあつちへ行つて下さい。

早苗 でも／＼今夜あふ所は……

専念 仕方がありません。今夜、ではもう一晚いつもの所にしませう。

早苗 さう、ちや私いつもの時刻に行つて待つてよ。

専念 待つて下さい、いつもの時刻ちや氣味が悪い、今夜はもう少し早く會ひませう。

もう一刻ほど早く……

早苗 いゝわ、ちやあ待つてますよ。

専念 ではさやうなら！

ト言ひ捨てて下手へ走つてゐる、早苗もそのまま、花道を走つて入る、上手から圓觀が師親の他藤原秀世、

源重長、大江忠頼、伊東兼綱等の武士を導いて出る

圓觀 兎に角御案内を申しませう。何しろ明るい内に附近をよく御覽になつておかぬと

夜更けてからの仕事はしにくうございますからな。

師親 いかさまな、現場をみてから何かの手筈をきめることにいたしませう。

皆々それがよろしうございます。

ト一同下手へ去つてしまふ舞臺や、空、極めて遠く鐘の音——漸次あたりが暗くなつてしまふ

向ふから平忠盛簞笠に身をつゝみ人目を恐るゝやうに、用心深く四邊を注意しながら出てくる。此時上手から侍女淺茅に炬火を持った舍人行盛が付き添ふて上手から出てくる。忠盛は淺茅と行き會ふて顔を見られぬやうに用心深くすぎゆからうとしたが、茅と行盛は注意深く忠盛を見る。行盛がいち早く忠盛をみさめる。

行盛 あゝ忠盛様……

淺茅 おゝ忠盛様でございますか、いゝ所でございました、淺茅でございます。

忠盛 エツ、おゝこれは誰かと思つたら淺茅だったのであつたな今頃どこへゆかれる。

行盛 どこへと申してあなたをお迎へに出て來たのでございます。

忠盛 ナニ迎ひ？それは大義だつたな、さつきの使は届きましたかな。

淺茅 たしかに届きました。ございます、今夜あなたは宮中の宿直の番におあたりになつてゐましたさうですのに、よくまあお出まし下さいました。

忠盛 とても出られぬと思つてゐましたが、晝間姫から遣はされた。あの優しいお手紙を見てからどうしても今夜あはずにはゐられぬやうな氣になつたのです。

行盛 然しお役目の方の手がよくまあぬけた事でございますな。

忠盛 いや、手がぬけたといふわけではないが、實をいふと宮中からぬけ出して來たのだ。もつと早く來たかつたのだが晝の下番者と面倒な交代の引きつぎなどがあつて随分弱らされた。それで姫に先刻取り敢ずの使をさし上げておいたわけなのです。

淺茅 姫様もあのお使ひで下さうお喜びでございました。

忠盛 私は明朝夜のあけるまでには、是非とも宮中へ歸つて居ねばならぬ身體だが、さうしたあわたましいひまを盗んでも、かうして逢ひに來る私の心は、姫もよく酌んでゐてくれる事でせうな。

淺茅 それはもう申すまでもない事でございます、ところで忠盛様、實は唯今不意に困つた事が出來たのでございます。

忠盛 ナニ困つた事？、姫の身に何か異つた事でも起つたのですか。

淺茅 いゝえ、そんな事ではございませぬが今しがた姫さまのところへ、不意に六條のお父さまがお見えになつたのでございます。而も三人もお友達をつれてお越しでございまして、これから皆で夜の更けるまで管絃の合奏をして遊ばうといふ事になつたのでございます。

忠盛 それは困つた事が出來た——折角無理をして參つたのに、それでは今夜は姫に會へぬわけなのだ。

淺茅 いえ、それ故私がお使に來たのでございます。姫様のおつしやるには、その遊びの事は、病氣とか氣分が勝れぬとか斷つて、お客様を早く歸すやうに致しますから、それまでの處あなたにはすみませんが、ごこか近所で暫く待ち合せていたゞきたいこの事でございました。

忠盛 待ち合す？それは困つた事だな、私はこれでも公務をば、はふつたらかして來てゐるのだからな、そんな呑氣な事はしてゐられない。都合が悪いのならまたの夜にするよか致し方がない。では私は引かへす事にしやう。

淺茅 アレ忠盛さま。そんな事を仰しやるものではございませぬ。それでは折角姫様の切ないお心づかひが無駄になるではございませぬか。

忠盛 でも私はこんな所にぶら／＼してゐるわけにはゆかない。人にでも見つかると困るからなア

行盛 大丈夫でございます、今頃からこんな所へくる人はございませぬ。それにこの頃は夜になるとこの山内に妖怪が出るといふ噂で、まだ宵の口の唯今からもう人通りはなくなつてゐるのでございます。

淺茅 忠盛様、そんな恐ろしい所もいとはず、若い身空で、わざ／＼姫様のお使ひであなたのお迎へに出てゐる私の身にもおなり下さいまし、このまゝ強ひてもお歸りなさいますなら、あなたはほんとうの情知らずと言はれても致し方がございませぬ。

い。

行盛 それともあなたは噂の妖怪が氣味が悪くて、待てないごでも仰しやいますか。

忠盛 馬鹿を云つてはいけない。左様な事は心にこめてもゐないが、實際こんな所で一時も、二時も雨にぬれて立つてゐるなど可なり迷惑な事だからなア。

淺茅 それならいゝではございませぬか、むかし在原の業平は、もと通ふた女の住み古したあき家の簀すのこで、夜のあけるまで立ち盡して月やあらぬ春やむかしと忍び泣いたと申すではございませぬか。まして今にも會へる姫様の御都合で、半時や一刻ひとときお待ち合せ遊ばす位は、戀する人の常には何でもない事ではございませぬか。

忠盛 さういはれては致し方がない。では暫く待つ事によしう。

淺茅 エ、そんならお待ち下さいますか、有り難うございます、では私は歸りまして姫様に左様申しませう。

行盛 然しあまり長く待つのは困るから左様心得て置いて貰ひたい。私には公務があるから業平のやうに夜があけるまで立ち盡すわけにはゆかないからな。

淺茅 ほつ、心得ましてございます、程なく私がお迎へに参りますから、あまり遠く
おいで下さいませぬように……では御免下さいまし。

ト淺茅と行盛は上手へ戻つてゆく、遠くで鐘が鳴る。忠盛はあまに一人迷惑さうに空を見あげると雨が
ぼつ／＼降つて来る、簑笠をさりつくらふ間に舞臺靜かに併し無雜作にまはる。

第二場

祇園山内の他の一部

舞臺の中央に大きな石の燈籠に燈が一つついてゐる外、四邊の物すべて非常に暗く陰鬱な色につま
れてゐる。

第一場から第二場へ廻轉の間、遠くの鐘が鳴りつゞいてゐるが舞臺定まるこやむ。舞臺暫く空、雨の音
のみが或は激しく或は緩く時々の變化をもつて舞臺を満たす。

やゝあつて炬火をもつた、高師親を始め僧圓觀、武士秀世、高長、忠頼、兼綱等が上手よりあらはれる。

師親だけが炬火を持ち他は持つてゐるが火をつけてゐない。舞臺少し明るくなる。

師親 どうです圓觀どの、もうそろ／＼出る頃でせうな。

圓觀 いやまだ少し早いやうですが。

秀世 随分と待ち遠しいものですな。

高長 さつきからもう一時ごきあまりも待つたやうですな。

圓觀 そんなものでございませうな。けれど妖怪の出るのはもう一時も後の事なので
ございますよ。

忠頼 まだ一時も？、そいつは大變だ、我々余り用意を早く仕過ぎたやうだな。

兼綱 でも貴公がさつきから無暗とせき立てたんぢやないか。

忠頼 いやさつきはもうおそいと思つたものだから……、

師親 いや／＼一體われ／＼はすべて少しはやり過ぎるやうだ、妖怪退治など、申すも
のはもつと落ちついてやらなくてはいけない。

秀世 然し手筈を早く決めとくのは悪い事ぢやありませんよ、どうです圓觀さん、妖怪
はこの方向から来るのでせうな。(ト下手を指す)

圓觀 いやそれがわからないのです。何しろやみの中から忽然と浮いて出るのですから
な、然し兎も角、こゝにある燈籠を中心に活躍するといふ事は事實です。

高長 エ、此の燈籠？（ト一同無氣味さうに見る）

圓觀 はい、この燈籠です。こゝの臺石の處へ、かうつかまつて暫くじつとして、やがてふいつと後うしろへかくれる。暫くするとまた前へ出る。さういふ事を二三度くり返すかと思ふと、ふうわく／＼とあつちの方（下手の方を指す）へ飛んでゆくのです。

師親 その話は先刻も承つたが、こゝでかうして聞くともまた何だか新しい話のやうに感ぜられますな。

高長 貴公は慄へてゐるのぢやないか。

師親 馬鹿をいつてはいけない——誰だ刀をがちやく／＼いはせるのは。

秀世 私です何だか雨の加減かうすら寒くて仕様がなのです、早く妖物が出ないものかなア。

師親 寒ければこの炬火をもつてゐたまへ。火の加減で少しは暖かだよ。（ト秀世に渡す）

あゝそれから炬火はあまりむかふから見えないやうにかくして持つてゐたまへ。

秀世 承知しました。（ト袖で覆ひ乍ら持つてゐる）

忠頼 それで圓觀さんその妖怪といふのは男なんでせうか女なんでせうか。

圓觀 妖怪の男女はわかりませんねえ。けれど兎に角銀の針のやうな毛が逆立つてゐるのです。而も上の方で無雜作に束ねてゐるのですが、その中から青い光が八方にさしてゐるのです。よほど功を経たものらしいが、毛の長い事から考へると、男といふよりも寧ろ女と考へていゝだらうとおもひます。

師親 つまり鬼婆なんですか。

圓觀 だらうと思ひます。

兼綱 顔は随分恐ろしいものでせうな。

圓觀 ところがその顔がどうもはつきりしないのです。全體が眞白で顔と胴體の區別がよくつかないので、顔だけで胴體が無いものだとも思へるし、胴體だけで顔のないものだとも思へるのです。ところでどうかすると、その束ねてゐる銀の針のやうな髪の毛全體が、すつくと空に立つたかと思ふと、その下から火焰のやうな眞赤まっかなものがくわアツと……

師親 あゝ圓觀さん、一寸待つて下さい、あなたは少し話がお上手すぎる。もう少し平凡にやつていたどかないと、何だかかう悪い夢にでもうなされてゐるやうな氣になります。

圓觀 これは恐れ入りました。つまり其の、私の只今申したのは怪物の口なのでございませうな、口があるからには眼も鼻もなくてはならないのですが、それが實ははつきり致しませんので……………

雨激しく降り出す、

師親 あゝこれは大降りになつて來ましたな。君、その炬火を消さないやうに。

秀世 ごうもかう降つては消えないわけにはゆきませうまいよ。

圓觀 いやもう消しておしまいなさい、所詮駄目です。消えたつて心配はございませぬ。今夜はこの燈籠にうんと油と燈心を用意してありますから、炬火はすぐつきます。

この時炬火きえる、舞臺再び暗くなる、

秀世 あゝ消えた。

師親 仕方がない。そのまゝでゐたまへ。暫くあの蔭へ入りませう。

忠頼 あゝ一寸、一寸お待ちなさい。私はさつきから妙なものを見つけてゐるんだから。

師親 エ、妙なもの？それは何ですか。

忠頼 あれ、この方向をすかして御覽なさい。何だか妙にふわ／＼した白い物が浮いて來るやうですよ。

兼綱 エ、ぢやあいよ／＼妖物め、やつて來やアがつたんだな。

師親 やかましくいつてはいけない(ト暫く下手をすかし見て)成程怪しげなものだな、圓觀さんあれではないでせうか。

圓觀 まゝ待つて下さい、私にはよくわかりませんが……………或はさうかも知れませぬ。

高長 いや／＼やつて來やがつた。さアこれから……………

圓觀 少し今夜は出る時刻が早いやうですが。

師親 いやもう案外おそいのかも知れませぬよ。さあ皆蔭へかくれなさい。

圓觀 さ、さア、きましたぞう……………(ト怖さうな聲を出す)

師親 圓観さん、あなたの聲がいやですわねえ。さア皆私が第一番目に妖怪に斬りつけるから皆そろつておつて、下さい。

兼綱 よろしい、さア皆用意しませう。

師親 暗いから同志討をしないやうにお互に氣をつけてな。

皆々 承知いたしました。

ト皆々燈籠の奥の暗い樹立の中にかくれひそんでしまふ。

トこの時(下手から)簑笠に埋もれた男が出て来る燈籠の前まで来た時、師親矢庭に飛び出して斬りつける。簑笠の男が體をかはして師親を強く突き放したので師親は見事に尻餅をつく。

師親 やあ各々方御油断あるな妖怪は手硬うございますぞ。

(樹蔭から他の四人刀をぬきつれて斬りかゝつたが、簑笠の男は頗る手硬い。よき程にあしらふて、早く燈籠を楯にとつて身構へる。)

男 ヤア何奴なれば理不盡にも斬りかゝるのだ、人違ひするな無禮者……………

師親 ナニツ、人違ひ?(ト暫らくにらんでゐたが)おい〜皆一寸待ちたまへ、これは妖怪ではなさうだ。

男 ナニ妖怪だ?これ、間違つて貰つては困る。私は正に人間だ、まア一寸刀をひいて下さい。

師親 成程これは人間らしい、圓観さん〜一寸炬火をとぼして下さらぬか。

圓観 何だかおかしいと思ひましたよ、一寸おまち下さい唯今とぼしますから……………

ト炬火をつけて持つて出る、舞臺や、明るし。

師親 や、成程、これは正しく人間だ。これは甚だ慮外申した(ト炬火で顔を見るそそれは平忠盛である)

師親 やあ、これは平忠盛様でございますな。

忠盛 おゝ、これは高師親殿か。

師親 これは驚きましたなア……………

皆口々に『大失策ですなア、成程手硬い筈だ、驚いたなア。』

忠盛 ほんとうに驚きましたな、さうして皆さんはさうしてこんな所へ來てゐるのです

師親 實は今夜近頃噂の妖怪退治を企んで來たのです。

忠盛 ナニ、妖怪退治——

衆綱 近頃はあまり世の中が無事で、吾々の腕が鳴つて堪らないものですから、皆と相談をしてかういふ事で鬱を散さうとしてゐたのですが、あなたを妖怪と間違へたのはすみませんでした。

秀世 これが忠盛殿であつたからお怪我もなかつたが、他の人だと、我々の刀にかゝつて馬鹿な目にあつてゐたにちがひない、危い事でした。(この間に他の武士も炬火をつける舞臺明るくなる)

忠盛 は、左様か、それでわかりましたが、然し皆さんの腕前の様子では妖怪退治は少し危いものですな、私がかう構へてゐると、皆の太刀先が少しづつ慄へてゐるやうでしたが……

師親 いや、あれはあまり逸りすぎた精もあつたやうでした。何しろ若い人ばかりですからな、皆もう少し落ち付かないといけませんな。

忠盛 さうです、落ち付きが肝腎です。頭に血を上らせては物は斬れませんよ……

忠頼 然し忠盛殿、あなたはまたどうしてこゝへお越しになつたのでございます……

忠盛 エ、私……私はその……(ト困る)

高長 あゝさうだ、あなたは今夜たしか宿直の番に當つて居られたやうでございますな。先刻私どもの組頭と事務の引きつぎをなすつてゐらしたやうだが、それがどうしてこちらへ……

忠盛 あゝこれは困りましたな、ナニ實は私も……その怪物退治がしたくて來たのです。

圓親 エ、ではあなたも退治に來て下さいましたのでございますか。

師親 これは當祇園の僧房に居られる圓觀といふ人です、妖怪の實見者なのです。

忠盛 初めてお目にかゝります……それで實は私も豫々妖怪の噂をきいて、いつかは退治してやらうとは思つてゐましたが、今日までその機會がございませんでした。今夜宿直の番に當りましたが、御承知の通りあの役目は至極退屈なものでしてな。ちつとしてゐると耐りません。それでふと急に今夜あたり妖怪でも退治たらといふ

氣になつたのです。私は御承知かも知れませんが思ひ立つたら矢も楯も耐らなくなる性分です。何だか、今夜退治にゆかなければ誰かに先を越されさうに思はれて詮方がなかつたものですから、到頭勤務から抜け出してやつて来たのです。それを皆さんに見つけられたのは面目ありません。どうか此事はお上へは秘密に願ひたいもので……

師親 さうでございましたか、よろしうございますとも。なアに宿直と云つたつてこの頃のやうに無事では誰も眞面目に勤めてゐるものはございませんよ。ひどい奴になると、夜中から女の處へ泊りに行つて、曉がたには戻つてゐるといふけしからぬ奴もあるさうです。

忠盛 ヘエーそれはひどい奴ですな。

師親 妖怪退治のために勤務をぬけ出したなご、きこへても武士として立派な事です。殆んど秘密にするにも及ばぬ位の事です。

高長 殊に法王さまはかういふ武ばつた事が非常におすきなだから、知れたつてお答めはございますまい。ちやうどい、都合だ、我々と一緒になつていたゞく事にしやう。

秀世 さう願へれば、結構でございますな。かういふ有力な同志が出来たら我々も非常に心丈夫になるわけです。是非御一緒にお願ひ致したいものがございますな。

忠盛 ……それはこちらにも望む所ですが……(ト非常に困つて)然し妖怪はまだ中々出ないのでせうな。

圓觀 さあ、まだ少し早いかとも思ひますが――

忠盛 もう半刻位の間に出ないものでせうか。

圓觀 さアそれはわかりませんな。何分對手が妖怪の事ですから――

忠盛 あまり長く待つと成ると一寸困りますな、何分勤務をぬけ出して來てゐるので――

師親 そんな事は問題にならないと申してゐるのではございませんか、かういふ事でもしお答めがあつたら我々からでもお詫致しませう。

忠盛でも……さういふわけにもゆきませんからな。

兼綱 忠盛殿。あなた何故その様に仰るのでございます。あなたは一體始めからそのお積りでおいでになつたのではございませんか、それに今更になつて急に彼是いつて吾々から逃げるやうになさるのはどうしたわけでございます。

忠盛 いや、逃げるといふ譯ではないのですが……それがどうも……

師親 いやそれではわかりました。忠盛殿は吾々と事を共にすることを好みにならないのでございませう。

忠盛 イヤ、決して左様な……

師親 イヤどうもさうらしい。如何さまそれは御尤もな事だと存じますな。當時驍勇をもつて聞へてゐる忠盛殿が、タカが一疋の妖怪を退治するのに、吾々同志数人と事を共にしたと聞へてはこれは忠盛殿の名折れになる事だ。皆さんさう思ひませんか。皆々口々 成程、それもさうですな。

師親 どうです皆さん、こゝは一つ我々の先輩として、また武道の長者としての忠盛殿

を尊敬するために、今夜の妖怪退治には吾々は一切手を引いて、すべてを忠盛殿御一人におまかせて置くのが至當であらうと思ふのだが如何です。

高長 成程、それには至極賛成です、皆さん如何です。

皆々 無論異議はありません、よろしうございます。

師親 では忠盛様、皆も賛成してゐるやうですから、吾々は手を引く事といたしませう。

忠盛 ナニ、それではすべてを私の自由に任せてお引あげ下さるのですな、ありがたうそれでは私一人で引うけませう。

師親 どうかさう願ひます吾々は決して手を出しますまい。然し吾々がお傍でお手並を拜見して居る位はよろしいでございませうな。

忠盛 エ、傍にゐる、それは……それは少し迷惑なので……

師親 それ位の事はおゆるし下さつてもよかりさうでございしますが、我々は兎に角あなたを尊敬して手を引いた始末ですから、あなたも先輩として吾々を御指導下さると

いふ意味で……………

忠盛 それでは、どうしても妖怪退治の責任はのがれられません——

師親 イヤ、萬一の仕損じについての御配慮ならば御無用です。あなたが仕損じられる位の妖怪ならば吾々にも仕損するは必定でございますから、決してあなたの名譽に傷がつくわけのものではございません。よし又今夜仕損じられても明夜といふ事もございますから……………

忠盛 致し方がない……………ではむかうの木蔭からでも御覽なさい。

師親 お許し下さいますか、有り難う御座います。では皆あつちへ參らう、炬火は皆消してしまひなさい。

ト皆炬火を消すので舞臺漸次暗くなる。

忠盛 圓觀ごのとやら、妖怪はもう出る頃でしやうな。

圓觀 さアまだ少し早いやうにも思ひますが……………

忠盛 早く出てくれないと困るのですが……………あ、また降つて來たな。

ト迷惑さうに笠をかむる。此の間に圓觀師親はじめ皆々奥の木立にかくてしまふ。舞臺非常に暗い忠盛は燈籠の臺に腰をかけて待つてゐる。

雨一しきり激しく降る。上手から白衣、圓錐形に束れた大きな麥藁の束を被った異形のもの忍びやかにあらはれ燈籠の傍へ寄らうとする。忠盛の大きな蓑笠姿を見て腰をぬかさんばかりに驚き逃げやうとする。忠盛も亦非常に驚き夢中になつて怪物を捕へて力まかせになげつける。怪物筋斗うつてころがる。そのまゝ腰のぬけた如くぶる／＼ふるへてゐる。忠盛かけよつて刀の柄を握り、居あひ腰になつてじつと見る。怪物はたゞふる／＼ふるへてゐるだけである。やがて忠盛氣味悪げにそつと怪物にさはつて見る。怪物いよ／＼ふるひ上る。忠盛矢庭に押へつける、怪物しきりにもがく時、麥藁束はれさぶ。忠盛尙も押へつけて叫ぶ。

忠盛 やあ方々お出會なさい、妖怪は平忠盛生けどつた。

この時奥よりばら／＼圓觀、師親はじめ皆々かけ出る。

師親 忠盛ごのお手柄々々お仕とめなさいましたな。

皆々 怪物はござれです／＼。

忠盛 唯今組み敷いて居ります、早く明りをつけて下さい。

師親 承知しました早く炬火を……

皆心得て炬火をつけて忠盛の方へさし出す。舞臺明るくなる。

圓觀（ト見て）やあ、これは人間でございます。

忠盛 エ、お、人間だ……

ト吃驚して退いたが、くみ數かれた人間は氣絶してゐるさ見えて倒れたまゝである。

圓觀 やあ、これは死んで居ります、忠盛様、あなたお斬りなさいましたか。

忠盛 いや、刀はぬかぬ、生け捕りにした筈だが、之は驚いた人間を氣絶させたのだな

……

ト立ちよつて抱き起す、圓觀これを見て驚く。

圓觀 お、これは専念だ！私の弟子です——

忠盛 ナニ、あなたの弟子？ヤアこれは大變な事をしました。ともかくも介抱しませう。

ト皆うちよつて手當をするさ専念息をふきかへす。

専念 お助け下さいまし——生命だけはお助け下さいまし。

圓觀 やい、専念、しつかりしろ私だ——

専念 エ、——お、あなたは圓觀さん——あ、出ました——、お妖おまじなが出ました——

忠盛 まで——お妖が出たとはどこへ出た。

専念 この燈籠のところまで來ると、大きな笠のやうな頭をしてゐる、身體中長い毛が一つばい生へてゐるお妖が私を引つ捕へて——その後は知りません——あ、怖い——。

忠盛 は、それは大間違ひだ。お妖に見へたのは私だつたのだ。見るがいく、大きな笠のやうな頭をして（ト笠をつかむ）身體中長い毛を生した（ト袋をつかむ）お妖に見えたのはここに居た私だ。

専念 そんなら、お妖ではなかつたのでございますか——あ、驚いた。

一同 あは、これは大笑ひだ——。

圓觀 それはいくが、お前はまたこんな雨の夜更けに、何用あつてこんな處へ來るのだ。

専念 えつ、私？そ、それは……それはその……あゝ困りましたなア——
圓觀 何が困つたのだ。

専念 イエ、その困るといふわけはないのですが、一寸その人に言へない事なので……

圓觀 人に言へない事？そんな事があるものか、あゝ判つた貴様祇園様のお賽錢を盗みに行かうとしてゐるんだな。

専念 そ、そんな事はありやしません。けど、けど、——。

圓觀 そんなら何の用でこんな所へ来た。どうしても言はないのだな。

専念 イエ、申しますく、實はその——こんな事は人に云つてはならない事ですが——實は私に少し心願がございますので……一月程前から……毎晩祇園様へお百度に出ますので——。

圓觀 何だお百度を？

専念 はい、此頃はこの山内にお妖が出るといふ噂で私はもう怖くて仕方がないので

けれど、そんな事でお詣りを缺かしてはとても心願はかなはないと思ひますので一生懸命の元氣をつけて毎晩出るのでございます。今夜なども、實は晝間圓觀さんのお話をきいてあんまり怖うございますので、よつぽごよさうかと思つたのですが、それでは祇園様にすまないと思ひますから、少し時刻を早目に出て來たのでございます。

忠盛 ふむ、それは感心だな、その位堅固な心でなくてはとても思ひ事は通るまい。

圓觀 さうしてその心願といふのはごういふ心願なのだ。

専念 へえ……それはその……實は……え……私の父が病氣で大分むつかしいといふ國許からの手紙がございましたので……ごうぞもう一度は壯健たくしゃにしてあげたいと思ひまして、祇園様にお願をかけてゐるのでございます。

圓觀 ナニ、親の病氣を癒したいのでお百度を……ふむ専念、わしは今まで知らなかつたが、お前は感心なものだな、あゝいゝ心掛だ。そんな親孝行者だとは私は今まで知らなかつた。ほんとうに感心しましたよ。

師親 いかさま感心な小僧でございますな。それにつけても忠盛殿はごうしてこんなお百度詣の小僧を妖怪とおまちがえなすつたのでございます。日頃から膽のすはつたあなたもおぼえぬことでございますな。

忠盛 さういはれては面目ないが、實際この小僧あまりに異形な風體をいたして居つたやうでしてな。

圓觀 へえ、異形な風？専念、お前はごんな風をしてゐたのだ。

専念 へえ、別に變つた風のつもりではございませんが、尤も雨が降りますから少し妙な手製の笠は着て居りましたが。

圓觀 妙な笠、ごんな笠だ。

忠盛 (件の笠を拾ひ上げて) 御覽なさい、小僧はこんな風で暗がりをやつて來たのです、おいこれを一寸被つて見ろ。

ト専念の頭から笠を被せる。

忠盛 それから、かういふ風に腰をかゞめて……………。

ト専念に恰好をさせる、圓觀突然叫ぶ。

圓觀 あッ妖物！

一同 エッ

ト驚く専念も笠をかなぐり捨て吃驚した様子。

師親 ナニ妖怪？どこに！(ト師親その他の武士刀に手をかける)

圓觀 いえ、今この専念が笠を冠つた形、あれが、あれが…………私の見たお妖の形です。

忠盛 ナニお前さんの見たお妖といふのは…………。

圓觀 はい、あれです、あれですあれに違ひございません…………では私が昨夜見てお妖だと思つたのは、専念、お前のお百度詣りの姿だつたのかな。

師親 それだとすると、つまらない事だな。

高長 さうすると噂にやかましい當境内の妖物といふのは一體ごんな形をしてゐるのだらう。

秀世 かうなるごわかりませんか。然し兎も角ほんごうの奴はまだこれから出るわけな

んですな。

師親 イヤ一寸待つて下さい。私が見た妖物の形は、門前の茶屋の婆さんや、黒木賣の爺さんなどが見たといふ形とびつたり合つてゐる事をみると——ひよつとしたら噂の妖物といふのはこの専念の事であつたかも知れませんよ……イヤ、さういふとこの妖物の噂の出たのもつひ一月程前からで、お百度詣りを始めたといふ頃とも合つてゐるし……。

忠頼 成程さうきくと、私の家の召使が見たといふ妖物の話とも合つてゐるやうだ。ではそれに違ひない。

専念 へ、では、そのお妖といふのはつまり私だつたのですね——これは驚いた——。一同口々に、そいつは馬鹿々々しい話だ。

師親 然し随分、危い所であつた。先刻忠盛様の代りにこの小僧が來たのだつたら斬り殺してしまつてゐたかも知れない。

専念 いやな事を云つてはいけません。

圓觀 いや、ほんとうだ、全くお前は運が良い、いや運といふよりも、これはお前の孝行な心にめでし神様が加護あらせられたのかも知れぬ。

専念 へエ、ありがたうございます。

師親 なる程さう考へてみると忠盛殿はやつぱり豪勇だな、怪しい者を見て太刀もぬかずに手捕になすつたなどは吾々の及びもつかぬ所だ。

秀世 さうですとも、吾々なら先刻忠盛殿に仕むけたやうに、物もいはすにだしぬけに斬りつけますからなア。

高長 成程これは余程膽がすはつてゐないと出来ない仕事ですよ。

圓觀 明日にもなつたら私から多勢の人に吹聴するつもりです。

忠盛 あ、馬鹿な事を吹聴してはいけない。私は今夜秘密で來てゐるのだから。

師親 駄目ですよ、いくら秘密にしたつて、もう明日は宮中までも話が傳はりますよ。

何れ法皇さまから御褒美がある事せう。

忠盛 馬鹿な事をいつてはいけません。そんな事が知れたら御褒美どころか大きなお叱

りを受けまじやう、何しろ宿直の勤務をぬけて来てゐるのですからな。

師親 大丈夫でございおすよ、むかし渡邊の綱が羅生門の鬼を退治した時も、あなたみたいに宿直をぬけ出して行つたのださうです。それでお咎めどころか大さうな御褒美にあづかつたといふ先例のございますからな。

忠盛 然しあの頃とは時勢も少し違ふやうですから、あまり評判をして頂くと困ります。

忠頼 いゝではございませんか、お咎めがあつたところで武士としてはいほゞ名譽のお咎めです、あなたの豪勇な逸話として長く歴史にのこるお咎めです。

兼綱 いや、忠頼ごのお待ちなさい。忠盛殿がかうして評判をおさけなさいますのは、つまり忠盛殿の謙遜の美德かとも思はれます、あなたのやうに仰せられすと我々はたゞあのお言葉にも感服して置かうではありませんか。

忠盛 貴公までがいらぬ事をいつてはいけないな。

師親 それでは一同引あげると致しませうか、忠盛殿御一所にまゐりませうか。

忠盛 エ、御一所……いや私は一寸……

師親 何かまだ外に御用がおありでございませうか。

忠盛 いや、なに用はないが、あなた方とは道もちがふやうだから——それに宮中へかへらねばならぬから、成るべく一人でひそかにまゐりたいのです。

師親 それもさうですな。ではこれで、お別れする事に致しませう。

圓観 いかゞでございませう、あちらの庫裡でお湯など一つめしあがつては——。

忠盛 いや折角ですが私はこのまゝ失禮いたしたい。

圓観 左様でございませうか、では致し方がございませんな、失禮いたしませう——さア
専念 一所に来るが——。

専念 エ、私……私も一寸……。

圓観 何だ、今時分から一寸何の用があるのだ。

専念 へえ、實はまだお詣りをして居りませぬので、これから一寸お百度を。

圓観 あゝ、さうだつたか、そんならゆつくりして来るが——、ほんとうにお前は感心

な男だ、明日はお師匠様にも申しあげてやらう。御褒美があるかも知れない。専念 あり難うございます。

圓観 では忠盛様失禮いたします。

忠盛 御免なさい、では皆さん失禮します。

一同口々に 御免下さい、さやうならく。

ト圓観師親以下上手へ去る。

専念 さア、それでは私もお詣をしまわります。忠盛様今夜は大變御無禮いたしました。

忠盛 (頼りにあたりを気にしながら) いや私も失禮した。ではお前は早く………氣をつけてゆ

専念 へえあり難うございます、もう大丈夫でございます。噂の怖いおばけが私だと知れたので大安心でございます(と立ちかけて)考へて見ると馬鹿らしいでございますな。私は今まで自分の影法師に自分で怖^{おは}えてゐたわけでございますからな、……然しま

アいゝ今夜から何一つ怖いものなしに、お百度詣が出来るわけでございますな。

忠盛 むゝ随分信心をするがいゝ。お前の孝心は神佛が御覽じてゐるだらう。

専念 あり難うございます。あなたのお手柄も法皇さまの御耳に入りませう。

忠盛 ではさらばだ。

専念 御免下さいまし。

ト兩人わかれて二三歩ゆく、ト兩人とも立ちこまる。さうして互に見えないやうにして、ふん、と肩で笑つたが専念は忠盛の顔をぬすみ見て逃げるやうにして下手へ退場。

忠盛 専念の去つた様子を見て「ふん、ふん」と満足したやうな、さうして嘲るやうな笑。(幕)

(大正十一年七月大阪中座上演)

やれ三味線

場所——ある小都會の町外れ

時代——徳川の末期

時刻——秋の七つ下り

登場人物——旅藝人權六(可なり醜い男)その妻おろく(美しい女)旅藝人熊

吉、同仙助、泉屋八郎兵衛(可なり美しい男)藝妓、仲居、鮎屋の爺、料理人、若い者女中其他。

第一場 郊外の道端

向ふから權六、おろく、熊吉(三味線をもつ)仙助(尺八をもつ)登場。

熊吉 親方ア、何とかならぬものかいな、かう腹がへつてはもう歩けぬ……。

仙助 朝めしを喰たきりで水一ぱい吞ますにかう歩いてゐては、尺八を吹くどころか、もう息をするのも大儀になつて來た。

権六 やかましうぬかすなえ、腹のへつたは汝等^{わいら}だけではない、俺でも此おろくでも同じことぢや、ごぞで纏頭^{はな}でも貰はにや、ごうすることも出来るものかえ、まアもうちつと辛棒せい。

熊吉 辛棒はさつきから随分としてゐるせ、もう腹の皮が背中とひつついて人間の木伊乃が出來さうぢや。

仙助 けふのやうな忌々しい日があるものか、この邊の奴ら何といふしみたれぢや。

熊吉 麥飯でも構はぬ一膳振舞ふて貰ひたいものぢや。

権六 え、意地の汚ない事をぬかすなえ、今日初めてこんな目にあふのぢやあるまいし。まアもちつと辛棒してゐや、そのうちにはまたいつぞやのやうに、仙スが腰をぬかす程酔つ拂ふ事もあるかも知れぬわ。

仙助 あゝ、あの時の事を思ひ出すと、俺アもう腹の虫がでんぐり返るせ、親方ア、後

生ぢや、それ、姐御がしてゐなさるあの赤い帯あげをまげ込んだら、俺等に飯の一膳位はありつけさうにも思へるが……。

権六 ヘン、虫のえ、奴め、仕方がない、實をいへば俺も腹が減つて、もう氣が遠うなりかけてゐる、おろく、その帯あげを解いてくれ。

ろく これで皆がたべられるかえ。

権六 サア、何ぼ高うても二百とはふめぬ代物ぢやが、一人前に餅の三つ位にはあたらぬ事もあるまい。

ろく それはよいが、これを解いたら、帯をどうしやう。

熊吉 おつと姐御、それは心配御無用ぢや、さア熊吉のこの手拭と、それ仙助、われの手拭も貸せ、それかうつないだら、ヘン意氣な帯あげ。

ろく そんなら持つてゆくがよい。

ト帯あげと手拭をさりがへる。

熊吉 そんなら親方、俺アこれをまげてくる間、こゝで暫く、待つてゐて下んせ……。

熊吉 ハテわかかつてゐるわ、早う行けやい。

熊吉 おつと合點ぢや。(退場)

権六 やれ／＼こうなると、物どあはれとやらいふ奴が、泌々胸にこたえるのウ、廣い世界を所定めず流れあるいて、糞面白うもない唄ふたり踊つたりで、三文五文の合力をあてに同勢四人の命を繋いでゐると思やあ、ほんに危ないことではないか。

ろく 今夜もまたどこで寝ることやら、お錢がなければ木賃にも泊れず、またいつぞやのやうに藁小屋の隅で、犬ころと一所に寝ることであらうなア。

権六 氣を落すまい、まだ日は高いせ、どこでまたごんなうまい事にありつかうも知れはせぬ、一寸先は闇の世ぢや。

仙助 おいらもうその闇がいやになつた、一寸明るい所へも出て見たい。

権六 ヘン氣の弱いことをぬかすなえ、今更じたばた、悶いたとて苦しんだとて、何の役に立つものかえ、地の底で生れた土鼠もぐらもちは、日の目を見たら死んでしまふ、人間の土鼠はやつぱり暗いごん底で、うち／＼してゐるのが性にあふてるごいふものぢや

汝おんでも俺おんでも百萬長者の家に生れたわけぢやあるまいし、ごうで初めから宿なし同様の分際で、今更出世をしたら罰が當るわ。

仙助 成程さういやアこちごらはまだ出世の分かも知れぬの、随分今日のやうなひもじい目はする事もあるが、ごいふて汗水流す程の仕事一つするではなし、きたない衣服でもかうしてぞべら／＼と著流して、ぺんぺこ三味線一挺が資本で、その日／＼の命がつなげる上に、時には旨い物のあはれ喰も出来ると思やア、ふ／＼こちごらにはこちごら相應の運があるものぢやなア……運といやア、また親方のやうに、俺らの貫ひの頭をはつて、のんこしやアをきめ込まつしやる、其上まだこんな美しい姐御を女房の候ふのと、勝手な真似が出来るといふのは、こいつはちつと運がよすぎるテ。

権六 何をぬかしてゐるのぢや、汝等わいらの頭をはる代りには、汝等の命を嫌の帯あげで養ふのよ、女房が美しいといふて、此ひもじい腹のふくれるわけでもあるまいし、さう羨んでは貫ふまい、——ぢやが何ごいふても此女こいつは俺らの商賣道具ぢや、あのや

けな踊一つを賣物にして、こちとらの鼻の下がぬれるとすれア、大切にして貰はう
せなアおろく。

ふくいつまでかうして歩いてゐねばならぬのであらうなア。

権六 いつまで？フン死ぬまでよ、門づけの旅藝人が檜舞臺で何百兩といふ給金貰ふた
ためしもきかず、纏頭はなに千兩箱貰ふたといふ話も知らず、やつぱり三文五文の青錢
で、おあり難うの百萬陀羅をいふたあげくの果は、ごこぞの原でのたれ死か、よつ
ぽごよう行て、木賃宿の、あの微臭い煎餅蒲團の上へでも、のせて貰やあ結構と思
へ。

ろく果敢ない身の上ぢやなア。

権六 へ、手前今それを知つたか、儂ぼんといやアごんな長者でも、死ぬ時やア白の經帷
衣一枚に、錢六文の小使で、十萬億土を長の旅よ、その事を思やア生れ落ちてこの
方、つゞれの錦ぼろ屑の中で、蠢々うごするより外に何も知らぬ俺らこそ、野たれ死し
て元々、二進勘定のいざごさは、生きてゐる中から帳面捧けしで、閻魔様も手數が

はぶけるといふものぢや。

仙助 成程親方ののたまはくは随分尤もな所もあるが姐御にしてはちと思ひきりが悪から
うせ、何でもきけば姐御は、よしある人の子であつたのを、ごうごかしたわけで俺
らの仲間へ落ちて來なはつたさうぢや、さつき熊めが持つて行た帶あげも、小さい
時にしてゐた帶ぢやごきいてゐる、今でさへ俺ら四人の餓死を助ける程の値うちも
のを、帶にしてゐた程の姐御をば、親方のいひ草ぢやないが、俺らのやうな土鼠もぐらと
一緒にせられては、こいつはちと割があふまいせ、なア姐御。

権六 フン、ごうで俺らの仲間へ落ちて來る程のへちまな運を持つて生れた奴なら、た
とひ殿様の落し子であらうが、長者の一人娘であらうが、土鼠もぐらは土鼠よ。

仙助 それでも女は氏なうして玉の輿こしといふ事もある、姐御の容貌かたちなら年季で身を沈め
ても、一年とたゝぬ中にごんな千兩箱にのらうも知れぬに、惜しいものぢやのウ。

権六 ふん、惜しいといふのはこつちの事よ、俺の女房を自慢にするのぢやないが、此
前に京きやうの女衒めづひんめがつきごふて、賣つてくれいごせがまれた時に、うんごさへいふ

ておきやア、今日のやうにひもじい目もせずすんだかも知れぬが、さてさうも思ひきれすのウ。

仙助 それもやつぱり戀とやらかの。

權六 戀？いや鮒ぢやらう、何でも少しは此女の生血を吸はにや得心がゆかぬわえ。

ろく おいて下さんせ、けふが日までお前に吸ひ枯らされた私の血を、この上まだアラになるまですひ盡されてから、棄てられてならうかいなア。

權六 同じ事ならアラならぬ先に棄て、欲しいとでもいふのか。

ろく ほ、もうどうからアラになつてゐるわいなア——むかしはこんながさ／＼した身體ではなかつた、たどひいやしい旅藝人にせよ、人間に生れたからには人間並に丈がのびた、脂ぎつた皮の下には若い熱い血高う波うつて流れてゐた、何を見ても面白おかしい時がないでもなかつた、美しい着物も見れば欲しかつたし、髪も綺麗に結ひたかつた、ありやういふとこんなさもしい門づけの稼業が心からいやで、何度にげ出さうかと思ふた事か知ればせぬ。

仙助 それにまたどうして逃げなさらなんだえ。

ろく 私はこの人が怖かつたのぢや、今でもあのざら／＼するあの眼で、グツと顔を見られると私はもう一たまりもなう縮み上つた、もし逃げでもしやうものなら、それこそどんなあたんをせられたかは知ればせぬ。

權六 それで今日までついて來たといふのぢやな。

ろく 私はもうすつかりあきらめてしまふたわいなア。先刻お前がいはしやんす通り、どうせ持つて生れた運なら、なるやうにしかならぬものぢやと、思ふてしまへば何でもない事ぢや。年がいたのでござんせう。見やしやんせ、あてもない旅にやつれたこの肌には、むかしのやうな脂氣は消えて、旅の塵埃が一つ一つの毛穴に醜うたまつてゐる。心もさうぢや、長い長いさすらひに、すさみにすさみきつた私の心にはもう昔の美しい望はなうなつた、初めは怖いやな人であつたお前も、今では頼母しいとしい男、心細い旅の身の杖とも柱とも頼んでゐる。

權六 ふ、ふ、。到頭一人前の土鼠になりおほせたの、よい心がけぢや。ふ、ふ、。

仙助 それはよいが、熊めは一體何をさらしてけつかるのぢやあんまり遅いではないか。

權六 成程さうぢや早う歸りやがればえゝのに……。

トこの時向ふから泉屋八郎兵衛、藝妓甲、乙、仲居をつれて登場、各々何かさんざめきながら權六の面を通りすぎる時、權六八郎兵衛の袖を控える。

權六 へエ、旦那、々々、一寸おまちなされて下さりませ。

八郎 エ、何ぢや、何か用かな。

權六 イヤ別に用といふわけでもござりませぬが、私等はお見かけ通りの旅藝人、一さし踊らせて下りませ。

藝妓 甲 あれ折角ぢやが、今日は急ぎの用がある故、またにしませうわいな。

仙助 急ぎ用とは、へゝゝお前さんがたも随分さあたぢけない、なア旦那、よしない事に十兩二十兩の金もおすてなさる御身分で、わしらにお出しなされる纏頭ぐらゐ何でござります、わし等朝からまだ何も喰はずに……。

權六 やい／＼仙ス黙つてい、なア旦那、いつも／＼高い金のかゝつた踊を御覽なされてゐるばかりが能では御座りますまい、たまには私等のやうな大道藝にもちつとは眼もごめて、随分極道の修業をなさるがよろしうござりませう。

八郎 はゝゝ極道の修業ならお前に教へて貰ふまでもない事ぢや、では何なとそこでやつて見るがよい。

藝妓 乙 あれ旦那様も酔興な、こんな門づけの踊を……おやめなされませ。

八郎 ハテよいわな、早くやつて見やれ。

仙助 へゝゝさすがに意氣な旦那ぢや、おかげでこのひもじい腹が……。

權六 えゝ何をぬかしやがるのぢや、さア三味線を引け、おろくよいか。
ろくそれはよいが、何を踊りませう。

權六 ハテそれは知れた事ぢや、旦那の生活なら、それ柳々で世を面白う、よさアやりや。

ろく あい——。

ト仙助の三味線にて権六唄ふ聲でおろく踊る。

「柳々で世を面白う、うけて暮すが生命のくすり、
梅にしたがひ櫻になびき、その日その夜の風次第、
うそも誠も義理もなし、初めは粹に思ひそめ、日増
にほれてつい愚痴になる、晝寝の床の憂き思、ごう
した拍子のひやうたんに、あた腹の立つ好ぢやね、

この間に八郎兵衛おろくに漸次氣をひかれる態。

八郎 やんや〜、成程これは中々隅におけぬ代物ぢや、そしてまア旅藝人に珍らしい
あの美しい女ぶり(ト権六の顔を見て)エ、イヤなに、こんな上手な藝とは思ひもよらな
んだ。

権六 ござりませぬ、ござりませぬ、ござりませぬ、ござりませぬ、ござりませぬ、
ござりませぬ、ござりませぬ、ござりませぬ、ござりませぬ、ござりませぬ、

八郎 むむ、纏頭もやらう祝儀もやらうが、これ、ごうぢやお前たち、私のゆく所へ來

ぬか、私らはこの先の備前屋といふ料理茶屋へ行つてゐるゆへ、あごから皆でくる
がよい、そこでもう一さし所望したいものぢや。

仙助 エ、そんならあのお座敷へ……こいつ有り難しかたぢけなし。

権六 やい、何をぬかしてゐるのぢやへえ旦那、それでは私らそこへ参りましてよろし
うござりますか。

八郎 よいとも〜、酒ものまさう馳走もしてやらう。

権六 へえ、あり難うござります〜。

仙助 あれ旦那様としたことが、そんな旅藝人を……。

八郎 よいわいの、私の氣に入つたのぢや、さア皆行かう、お前たちも早う來いよ。

権六 へい〜ぢきあごからまゐりませう。

ト八郎兵衛以下藝妓仲居等退場。

仙助 へ、親方ア、待てば海路の日和とやらで、こりやア棚から牡丹餅が落ちて來たや
うぢや。

權六 ふむ、牡丹餅といやア熊め一體何をさらしてけつかるのぢや……。

トこの時熊吉登場。

熊吉 さア買ふて来たぞ、あの帯あげで餅が十にすしが二箱よ、ちつと見倒されて口惜かつたが、仕方がない。

仙助 ハテよいわえ、そんな餅よりもつと旨い牡丹餅が降つて來やがつたぞ。

熊吉 へ、牡丹餅、一體そりやア何ぢや。

仙助 え、鳥がかつたのぢや、これから俺らはお座敷へ行くのよ。

熊吉 お座敷？そいつはしめた！。

ト叫ぶ拍子に煙草入を落す。

ろく お、この煙草入はえ。

熊吉 おつとそいつは——(トあはて、懐へねぢ込み)へ、へ、へ。

權六 ふ、ん、旨い事さらしたな。(ト笑ふ)

——舞臺廻る——

第二場 料理茶屋の離れ座敷

舞臺——二重舞臺の座敷、平舞臺は庭、下手が出入になつてゐる。

八郎兵衛以下藝妓仲居等酒をのんでゐる。

仲居 さア何ぞ一つお歌ひなされませ。

藝甲 ほんにさつきから、何やら氣のすまぬ顔ばかりしてゐやしやんす、もつと陽氣におなりなされませいなア。

藝乙 さア旦那様何ぞおきかせなされませいなア。(ト三味線をもつ)

八郎 これ、まて、歌もよいが、私はさつき道であふた、あの門づけの美しい女の來るのを待つてゐるのぢやが——。

仲居 あれ、旦那様も醉興な、何ば美しいといふてあんな旅藝人を……。

八郎 いやさうではない、あの女はたゞの女ではなささうぢや、あの顔付から、物腰、何でもよしある者のなれの果にちがひないと思ふてゐる。

藝甲 ほ、へ、そんなら私らの顔つきや物腰はよしありげには見えませぬかえ。

八郎 ござうして／＼中々よしがありませんうちや、何でも海に千年山に千年、春中に苔が生えてゐるさうに見えますの。

仲居 あれ、いやでござりますわいなア。

八郎 いや、ほんまをいふと、私はあんな落ぶれた女を見ると氣にかゝつてならぬぢや。

藝乙 あれ、まあ御親切な事わいな。

八郎 これ、さうではない、それにはちつとわけのある事だな——實は私には小さい時に許嫁いひなづりの女があつての、それが一寸むつかしいわけが出来て今では音信不通になつてゐるのぢやが、今にその女の事が片時も忘れられぬのぢや。

仲居 へえ——旦那様がそれ程仰るお方なら、さぞお美しいのでござりませう。

八郎 美しい？ふむそりやまア美しかつたのであらうな、何せよ別れたのはまだ子供の時で今ではろくに顔も覚えてゐぬが、何でも眼の大きい、括りくは領あたまの、人形のやうなよい兒であつた。

藝甲 あれ、何ちやいなア、そんな子供の時の夢をまだ見てゐやしやんすのかえ、子供の時に何ぼう美しうても、成長おほきうなつたらごのやうになつてゐるか知れたものではござんせぬ。

八郎 さア、それ故なほ更氣にかゝるといふものぢや。

此時女中登場

女中 旦那さま、あなたがお召しぢやと申して四人連の旅藝人がまゐりました。

八郎 ナニ來た、おゝ待つてゐたのぢや、ちきこゝへ通して貰はう。

女中 あい／＼。

この時權六、おろく、以下登場。

女中 あれお前たちはまア何といふ人ぢや遠慮もなしに勝手に入つて來て——。

權六 ハテ愚圖ぐづり々々いはしやるな、旦那とおいらは約束すみぢや、へえ旦那參りました。

八郎 おゝよく來た、さアこつちへ來るがよい、これ／＼女中、何か旨いものをこしら

へて、こゝらへ一杯のませてやりや。

女中 あい〜。(退場)

権六 へえ旦那御所望なら早速一さし御覽に入れませう。

八郎 あゝ一寸待ちやれ、踊も踊ぢやが、それよりも先づ聞きたいのはその女中さんの
こと……。

権六 エ。

八郎 物腰なり恰好なり、まんざら門づけの生れでもなささうちやが、そりやお前の女
房か。

五六 エ、女房…ナニ女房ではござりません、これは私の妹でござります。

八郎 ナニ妹、ハテお前のやうな男にもそんなよい妹があるのかえ……へえ……。

権六 旦那、さうお見くびりなさるものではござりませぬ、同じ瓜の蔓になつても出来
のよいのと悪いのとはござります、可哀さうに私らのやうなものでも、旦那のやう
な立派な筋目に生れたら、こんな門づけにもなりますまい。

八郎 これ、さう悪うとするものではない、さうしたつもりで言ふたのではない——した
が、兄妹でさうして歩いてゐるのも、随分と苦勞なことであらうの。

権六 さアその苦勞があるので面白いのでござります、世の中といふものは、いつも面
白かつたら面白うないも同然ぢや、旦那のやうに年中腹のふくれてゐるお方には、
どんな旨い物を喰ふても旨うはござりますまいが、私らのやうに、喰ふや喰はずで
は、牛馬の喰やふやなものでも、たらふく腹に詰めこんだ時の心持は、旦那がたに
わかりやうはござりませぬ。

仙助 ところで今日はその腹の皮のはちける程御馳走にありつけるといふものぢや。

権六 やい、何をぬかしてけつかるのぢやい、へえ、旦那、下司な奴はすぐとこれでご
ざります。御ゆるしなされて下さりませ。

八郎 ハテ今に女が、何か持つて来る程にたらふくやるがよい、それにしてはひごう
手間がある事ぢや、一寸催促して見やれ。

仲居 あい。(ト手を拍く)

女中 あい／＼（ト盤塞に酒肴をのせて登場）およびなされませ。

八郎 おと持つて來たらそれでよい、さア皆そこで遠慮なしにやつてくれ。（女中退場）

権六 へえ、あり難うござります。

仙助 やアこいつは大した御馳走ぢや。

熊吉 久しぶりでよい匂ぢやなア。

仙助 うるさい奴ぢやな汝は……。

八郎 早うやるがよい。

権六 そんならおよばれ申します、おい、熊、仙ス。

仙助 おい。姐御もやらしやれ。

ト皆集つて不行義に喰ふ、八郎兵衛藝妓等顔を見合せ眉をひそめてゐるこの時鮎屋の爺、料理人、若い者四五人登場。

鮎屋 あゝ居やがった、こいつぢや／＼。

若者 一なぐつてしまへ！。

ト権六等の中へ飛び込んで熊吉を引づり出す。

熊吉 やい、何をさらすのぢやい、どうしやがるのぢやい。

鮎屋 どうするも、かうするもあるものかえ、おのれにちがひない、煙草入を盗んで行
きやがったのは。

熊吉 やい、やい、こいつ途方もない事をぬかしやがる、俺がいつそんなものを盗ん
だ。

料理人 愚圖々々いふ事はない、兎も角あつちへ來い、こゝはお客様のお座敷ぢや、
文句があるならあつちでぬかせ！。

若者 二さア來い！。

熊吉 馬、馬鹿をぬかせ、ゆくわけはないぞ。

若者 三引づつてゆけ！。（ト皆々騒ぐ）

八郎 これ／＼、一寸まちやれ、一體どうしやつた。

鮎屋 へえ／＼、これはお座敷を騒がせましてまことに相すみませぬ。まアおき／＼下さ

りませ、こ奴めが今私の店へまゐりまして、これ、こんな帯を出してへト帯あげを見せ
る。銭がなうて飢死しさうな故、この帯で鯨を賣つてくれいと申しますので、可哀
さうに思ふて鯨二箱と、それに横に賣つてゐる餅を十まで包んでやりましたが、こ
いつが歸つた後を見ると、今、横へ置いたばかりの煙草入がなうなつてゐるのでご
ざります、何でもこいつが盗みくさつたのにちがひがござりませんのでかうして……。

トこの間に熊吉煙草入をそつと權六の方へ這はす、權六心得てすぐそれをおろくに渡す。おろく袖の下
にかくす。

權六 やい／＼、何ぢや、黙つて聞いてゐりやアえゝ事にさらして、氣の利いた言
ひ草をぬかしやがるな、やい、大道藝人でこそあれ門附でこそあれ、今までに他人
のもの塵一本盗んだ事のないおいらに、汝は盗人の名をさせようぞさらすのぢや
な。

鯨屋 ナニ、名をさせる？ フンおのれ氣の利いた言ひ草をぬかしくさつたな、愚圖々々

いふ事はない、文句は出る所へ出てからぬかせ、さア來い。

熊吉 おゝ行つてやらう、その代り盗んだ證據がなかつた日にやアたゞはおかぬからさ

う思へ、

若者一 その口上はあとでぬかせ、さア來い。

權六 よし、さア熊行け、俺も行つてやる、仙ス、汝も來い。

仙助 行かいでか、さア行かう。

鯨屋 さア來い、お客様お邪魔をいたしました。

トおろくの外權六以下の旅藝人、鯨屋若者一同退場、鯨屋の爺は行きがけに下手の方に赤い帯あげを
落してゆく。

仲居 まアどうなる事でござんせう、旦那様あなたまアどうしてあんな恐ろしい人たち
をおよびなされたのでござります、それ故私があこのやうにおどめ……。
八郎 これ。

トおろくの方を目で知らせて仲居に注意する、仲居困る。

ろく 恐ろしいござりますか、ほろほろ。その様に恐がることはいりませぬ。あれは皆
意氣地のない土鼠ちんちんでござります。

八郎 ナニ、土鼠だ？

ろく あい、何の因果でやら人間のどん底に生れて来て、暗闇より外に見た事のないか
なしさには、よみがき讀書は知らず商賈の道は知らず、人間並に明るい所では一日も暮され
ませぬ。そこでわれから名をつけて人間のもぐらもち、日の目を見たら死ぬと申し
ます。

八郎 途方もない事をいふ人ぢやな、——したが、その仲間にも、こなたのやうな美し
い女があるのも不思議といふものぢや、それにあれだけの踊のしなもある身でゐな
がら——どうしてこんな事をしてゐるのぢや、今までに何とかなりさうなものぢや
がなア——。

ろく さアその何とかなつた身の果がこれでござります、私は何も初めからこんな仲間
に生れたのではござりませぬ。

八郎 ナニ、初めからこんな仲間ではなかつたといふのか、さうあらう、私も最初
からさうとにらんでゐた、さうしてごこの生れの者ぢや、あの兄とやらいふ男も、
随分屈強さうな男ぢやが、どうして二人がこのやうになつた。

ろく ほろ、あれは兄ではござりませぬ、私の亭主でござります。

八郎 エツ亭主？あれが、……あんな男がお前の亭主……へえ……お前またどうして
あんな男の女房に……はろアお前あの男に誘拐かきわされたのぢやな。

ろく 誘拐したのはあの男ではござりませぬ。

八郎 ハテそんならどうしてあの男の女房に——まさかお前があの男にほれたといふわ
けではあるまいの、

ろく ほろほろ。私らの仲間ではほれるのすきのこといふ事はどうでもよいのでござりま
す。たゞもうわけもなしに、やもめの男とやもめの女が寄り合ふたらそれで夫婦……
……。

八郎 情ない事をいふ人ぢやなア、そしてそなたの素性といふのは一體何ぢやといふの

だえ。

ろくさア、それが何やら、幼い時の事で、私もたしかには存じませぬが、何でも私の記憶おぼえてゐるには、桃の花の咲く頃になると、廣い奥の間の床一面に、赤い毛氈が敷きつまつて、可愛らしい金屏風の前に、お雛さまがぎつしり並んでゐやしやつた。

八郎 いぢらしい事をいふ。——そしてそれがごこの何といふ所であつたか記憶えてはゐぬか。

ろくさア、どうしておぼえて居りませう、それから後はいつのまにやら住居すまひが變つて、心に残つてゐるはつらい事や悲しい事ばかり、白髪を逆立てた怖いお婆さんに藝を住込まれた事、朝夕となくぶち叩かれた事、他人の軒に寝て犬にかみつかれた事、木賃宿で虱に責められた事、そんな話なら何ぼうでもお話いたしませう。

八郎 あゝもうやめてくれ、きくだけでも胸がつまるやうぢや、もしこれが私の許嫁の女でもあつたら……。

藝妓乙 あれ何を仰やるのぢやいなア。

他の女 ほろろ。

トこの時下手で突然大勢の人聲が起る。

熊吉の聲 さアどうぢや、盗んだ證據があるなら出して見い。

他の男の聲 何をぬかしやがる、おのれにちがひない。

女の聲 あれい！。

八郎 な、なんぢや、あれは……。

仲居 あ、さつきの男が暴れてゐるらしい。

権六の聲 さアもう勘辨がならぬわえ。

他の大勢の男の聲 やつつけろ！。ぶちのめせ！。

藝妓甲 あれ、あれまア、どうなることぢや。あなた何とかしておやりなされませいなア。

八郎 どうするといふて私には仕様のない事ぢやが——。

仲居 それでも、あんな人をおよびなされたお係り合があるではござりませぬか。早う
行て何とかしておやりなさりませいな。

八郎 困つた事ぢやなア、仕方がない、それではいてやらう。(ト立ちかゝる)

藝妓甲 あゝそんなら私も見にゆきませう。

藝妓乙 わしもゆくわいなア。

八郎 まで／＼女が行ては危い、こゝにゐや。

この時又物騒しい音がする。

仲居 あれ、また暴れてゐる。早ういておやりなさりませ。

八郎 えゝ仕様のない奴ぢや。

ト八郎兵衛退場、藝妓仲居口々に何か言ひながらついて入る。おろく一人のこゝろ。そこらながめて、
八郎兵衛が座の傍に置き忘れた紙入に眼をつけ、そろ／＼這ひ上つて手早く懐に入れてしまふ。やが
てもこへ戻つてさりげなくよそほふ時、八郎兵衛登場、何か物を捜してゐるろく氣味悪げに襟から腰を
あげながら。

ろく ござうぞなされましたか。

八郎 イヤ、私の紙入れがないのぢやが——そこらに落ちてはゐなんだかえ——。
ろく エ、いええ。

八郎 ハテナ、どこえ落したのか——。

ト捜しまはり下手へ行き、赤い帯あげの落ちてゐるのを見つけて拾ひあげる。

八郎 ハテナ、この帯は——。

ろく あれ、それは私のでござります、さつき鯨を買ふ代にもたせてやつたのでござり
ますが、どうしてそこへ……。

八郎 ナニ、これがお前の帯……あのこれが……。(ト驚いてつか／＼座敷へ戻つておろくに)

れ。一寸こゝへ來やれ、お前この帯一體どこで買ふた。

ろく どこで買ふたか存じませんが、私の子供の時にしてゐた帯でござります。

八郎 ナニ、子供の時……それならまだこの仲間に入らぬ前からしてゐたといふのか
え。

ろく あい。

八郎 ええッ、それでは——おとそれでは——お前さんの名は、もしやおみねとは
いはなんだか。

ろく ハテそれは微かにおぼえてゐる私の幼な名ぢやが、どうしてそれを、……。

八郎 エッ、それではやつぱりおみねか、おと、おみねであつたか！
ろく あれ、どうなされたのでござります。

八郎 これ、そなたは——、日頃から氣にかけてゐた私の許嫁ぢや！
ろく エ、な、何と仰ります。

八郎 かういふたばかりでは合點もゆくまいが、これ、この帯、古くはあれ汚れてはあ
れ、この端に染めぬいた丸に桔梗は私の家の紋、またこつちの端に小さう、は、の字
をそめぬいたは私の名頭、こんな帯はもとより雛の節句にはいろ／＼な玩弄物の簞
笥長持に、皆私の家の紋をつけて贈り物にした事は、私は今に記憶てゐる。
ろく エッ……さうしてあなたはまた誰方ごなたでござります。

八郎 何をかくさう。私はこの界限で人にも知られた米問屋、泉屋八郎兵衛といふもの

ちや、お前の父御ていごも同じ米問屋で、大阪屋仁右衛門と呼ばれた有徳の人、そなたと
私は幼い時から親と親との許嫁であつたが、ふとした事から親同志が仲違ひして、
往來ゆきもせぬやうになつた間もなく、お前の家は俄かに財産限しんたいかぎりして、一家散々ちりちりになつ
たときいたが、生長おほきうなるにつけては思ひ出すのはそなたの事、幼い時に二人仲よ
う、隠れん坊や草履かくし、鬼ごごをして遊んだことが忘れられぬ、はア今頃はご
うなつてゐやうかご心にかけてぬ日は一日とてもなかつたのぢやが……そのお前が
そのお前が今日門づけになつて私の座敷に呼ばれて來うなごとは、こりやまア一體
何とした……。

ろく ええ、そんなら私は……（トつか／＼八郎兵衛の前へ上つてゆく）まアさうした素性そせいのもの
でござりましたか。（ト息せきながら言ったが、急に我を省みて）あゝわれとわが素性さへ知ら
ぬ身に落ちはてた私……。お恥しうござります／＼。

八郎 これサ、何が恥しい、何事も皆因縁ぢや、こゝで不思議にめぐりあふのも何かの
因縁、いや、お前と私が、ごうでも縁の盡きぬ證據ぢや、もう安心してゐるがよい

これからはお前に苦勞はさせませぬ。

ろくエ、何と仰ります、もう苦勞をさせぬとは、私をどうぞなされるのでござりますか。

八郎 當り前ではないか、假にも私の許嫁であつた女を、どうしてこんな慘めな事にしておかれるものか、私が引こつて厚い世話をしてやりませう。

この時權六下手にあらはれる話をきいて、すぐ樹立の中に身をかくしてしまふ。

ろくエ、それではあなたは、私を女房にでもなさるおつもりでござりますか。

八郎 ナニ女房？ さア女房といふて——それは困つたな、今では私には歴々とした女房があるのぢやが——。

ろく それではお妾になるのでござりますか。

八郎 コレをいふのぢや、男が女を引こつて世話をするといふのは妾てかけにする事ばかりと思ふてゐるのか、お前たちの仲間でないが知らず、私が世話をしやうといふのはたゞ世話をするだけぢや、どうでお前もそんな生活をしてゐるからは讀書

縫針の女の道もおろそかになつてゐやう、それも少しは仕込んだ上で望みとあらば婿もどらうし嫁入もささう。

ろく それではつまり美しいお慈悲の籠の中で大切に飼つて貰ふのでござりますな。

八郎 お前それがいやといふのかえ。

ろく 何のいやでござりませう、雨にぬれ霜にかちけて、飢じさにふるえてゐる藪鶯は美しい籠の中のおいしい餌が羨しうござります。

八郎 さうであらう、もう心配をすることはない、今からお前は引こつて、あの亭主とやらにも私からかけあつてあげやう、さうして……。

ろく あれ、まつて下さいまし、私はおいしい餌は羨しいが、その籠の中にこぢ込められるのがいやでござります。

八郎 な、なんぢやと。

ろく 旦那さま、私は女の行儀作法とやらいふものを知りませぬ。

八郎 さアそれはこれから仕込んでやらうといふてゐるではないか。

ろく 針もつ術さへ知らぬ私、お茶も花も知りませぬ。

八郎 それもこれから稽古をすればよいではないか。

ろく さアその稽古とやらがいやでござります。

八郎 ナニ、稽古がいやぢや？。

ろく 美しい籠の中で飼はれるからには、籠に相應しい美しい聲を出すやうに仕込まれずばなるまい、大切にいたはつて貰ふ代りには、お氣に入るやうに嘯らずばなるまい、私にはそれが辛うござります。旦那様、やつぱり私はこのまゝ野原へ放して置いて下されませ。

八郎 な、何といふ、女の道を習ふが辛さにこのまゝ放して置いてくれいとは、そちはまた何といふ情ない……いや、こなたは今のあの亭主が思ひきれぬのであらうの。

ろく 何を仰ります、あんな男、思ひきれぬのきれぬのといふ事はござりませぬが、考へて見ればやつぱり今の生活の方が氣が安うござりませう。女の道とやらいふもの

を知らないでは、通用のかなはぬあなたがたの世界は、私らには重い苦しい荷物でござります。

八郎 え、まア何とい情ない事をいふのぢや、そ、それがあの、人に知られた、大阪屋の娘のなれのはてか。

ろく 氏より育ちでござります、長いごん底の生活で私の心は、身體と一所にすさみはてました。

八郎 エ。

ろく これを御覽なされませ。

ト袂から煙草入を出して見せる。

八郎 エ、この煙草入は……。

ろく 鮎屋の爺が盗まれたといふのはそれでござります。

八郎 エ、そんならお前は盗人の……。

ろく まだござります。

ト懐から八郎兵衛の紙入を出して渡す。

八郎 やつ、こ、これは私が落したと思つた紙入れ……む、……

ト驚いて呆然となつてゐる。

ろく 旦那様、御免下さりませ、私はもうお暇いたします。(ト立ちかゝる)

うた二上り新内 〽わかれの鐘だよあきらめて——

この間におろくは立ち上らうとして足に痺しびがきれて困る様子であつたが、やつと下へ降りる。

八郎 ま、まで、そちにはもう……そちにはもうその惨むごたらしい仲間から逃げ出さうといふ望はないのか。

ろく あい……土鼠もぐらもちは日のめを見たら死ぬと申します……

八郎 な、なんといふ事をいふやうになつた。……これがあの人形のやうな罪のない顔をして、草履かくしや隠れん坊をして遊んでゐた女か……

ろく 旦那さま、もう仰つて下さりますな、私はまゐります……。(ト俄かに胸がつまつて来て) 御機嫌よう御暮しなされませ。(トゆきかけたが足がにぶる)

うた 〽道中御無事でゆかしやんせ

八郎 これ、一寸、一寸待つてくれ、そなた、そなたはまア何ともないのか、幼馴染の許嫁にめぐり合ふて、そんな言葉で別れやうといふのか、これ、さつきこなたがいふた桃の花のさく頃の雛の節句の思ひ出はごうぢや、あゝ、あの時は私はお客で、そなたの手づから白酒をのませて貰ふた。可愛らしい青や赤の雪燈はんげの陰で、そなたと頬すりよせて錦繪を見ながら、仲よう遊んだ事もあつた、その、その男にめぐりあふてゐながらそなたはさうして何ともなしに別れやうといふのか。

ろく え、……

ト立ちすくんだが、急に涙がせぐりあげてくる、そのまゝ地上に崩折れる、この間に權六樹蔭から姿を出して窺つてゐる。

八郎 おみね!(トつかく寄つておろくの肩に手をかける)

ろく だ、旦那様!(ト思はずすがりつく)

ト、この時權六ついと出て。

権六 おろく！。土鼠が目の目を見たら（脅迫するやうに）生命がないぞ！。

うた——一夜ごまりの思ひ妻、またのごげんもありやなし

トこの間に権六、八郎兵衛の方に氣をひかれるおろくを無理やりに且つ手暴くひつたて、ゆかうとする。

——（静かに幕）——

（大正十年京都顔見世興業上演）

くるる 髪

場所——大阪道修町の藥種問屋、淡路屋惣兵衛の店。

時代——維新前。

時——夏の日の暮れ前。

登場人物——淡路屋惣兵衛、その弟惣七、娘おごみ、番頭忠兵衛、手代藤七、丁稚長松、他家の手代、女中。

舞臺——店先は二重舞臺、正面と上手に出入口がある（正面は奥へ通じ、上手は勝手元へ通ずる）下手は上げ店になり簾暖簾が引まはしてある。平舞臺内庭、下手に入口がある。（この入口に下し戸の装置あり）上手には勝手口が開いてある。店の装置すべて大阪船場の商家らしい氣分 出す。

幕があく番頭忠兵衛、結界の中で何か書き物をしてゐる。手代藤七、丁稚長松、竹松、そこらに取亂されてある荷物を片づけ掃除にかかゝつてゐる。

藤七 やい／＼長松、何をきよろ／＼してるのぢやい、早う繩屑を拾ふてしまいか、
日が暮れるやないか。

長松 へい——。(ト散亂した繩屑を無雜に塵取へ投り込む)

藤七 やい／＼それをほつてしまふ氣か、旦那に見つけられたら、また小言やぞそん
な長い繩はつないで玉にして置いたら、また使へるやないか、儉約しよつといふ事を知ら
ぬか。

長松 へい……藤七さんも此頃は旦那の儉約がうつゝたのやなあ。

竹松 へ、傾城買のぬか味噌汁で、儉約しよつ々々ど丁稚を叱り飛ばして置いて、晩にはこつ
そり曾根崎か。

藤七 何をぬかしやがる、こいつ……。(ト竹松の襟髪をつかんで小づゝ)

竹松 やあ、あやまつた／＼。

長松 わは／＼／＼。

忠兵衛 おい／＼、ほたわたらいかん、早うしまいかいな、折角けふは店が早うしま

へると思ふてゐるのに、遅うなるやないか。

藤七 それ見い、そやよつて早うしまへといふのや。

ト竹松を突き放す、竹松藤七の方へ赤んべいをする、藤七くらはせる眞似をする、竹松わアいさ逃げる

忠兵衛 藤七さん、小供に對手になりないな、荷物の方はどうや、もう片づいたか。

藤七 へいもう片附きました、これからそこらを掃除したら終しまひです。

忠兵衛 御苦勞々々さあ小供早うせいよ。

長松 へい——。

ト掃除にかゝる。

藤七 番頭はん、旦那さんエライ遅うおますな。

忠兵衛 さいな、大分暇がいるな、何せ旦那さんも此頃は一生懸命やさかいな。

藤七 ほんまによう働いてどおますな、以前は中々あんな人やおまへなんださうな。

忠兵衛 親旦那おやだんさんの生きておいでなはるうちは困りものでな、俺も随分迷惑したもん
や。

藤七 エライ極道やつたといふやおまへんか。

忠兵衛 そりやお前三日にあげず曾根崎さ島の内へかけもちのすばり込や、そのたんびにお迎ひに行くのが俺の役や、何ほ泣かされたか知れへんせ。

藤七 そんなお方がようまあこの頃見たいに、堅うなれたもんやなア。

忠兵衛 氣がついたんやなあ、尤も氣がつかいでなるものかいな、親旦那さんが亡うなつた後は小さい若旦那と番頭一人に手代丁稚が三人、女中一人、外にまだ親類の娘はんが、厄介になつてゐやはる、それが皆旦那さん一人の肩にかゝつて來たのやもんなあ、それにかういふと悪いが、この家の資産も大分左前やよつてなア。

ト云ふ時下手から田中屋の手代幸七登場。

幸七 今日は、暑い事でおますな。

忠兵衛 お、誰やと思ふたら田中屋はんか、さアまあおかけ。

幸七 へやおほきに……早速やが番頭はん大將はゐやはりますか。

忠兵衛 旦那はんは今お留守やが、例の敷金のことかな。

幸七 へい、大分のびてゐますので、番頭がやかましくおますのでな。

忠兵衛 ほんまにすまなんだ、何せあの荷物は相場の下りを喰ふてるのでな、卸し先から一寸も金をおこしくさるので困つてるのや、といふて元方のお前さんの方へうちが拂はぬといふ譯にも行かんし、旦那はんもえらう御心配なはつてゐる仕末やさかい、どうぞ悪う思ふて貰はんやうにな。

幸七 へえ……そりやまアお家の事だすさかい信用はしてゐますけれど、私の方でも帳面が消えぬので、旦那はんはやかましい番頭はせつくで、賣り込んだ私がつらうてなりまへん、せめて半金だけなど何とかして貰へまへんやらうか。

忠兵衛 すまんすまん、ほんまにすまん、お前さんに言はれるまでもない事や、旦那はんもさう仰有つてゐた、今日も實はその事でお出ましなはつた仕末やさかい旦那さんへ歸つて見えたなら何とか色がつくやらう、何ならお前さんそこで暫く待つてゐるか。

幸七 へん……困りましたなア……。

この時下手から淡路屋の弟惣七登場、家へ入る。

惣七 唯今歸りました。

忠兵衛 お、若旦那お歸り。

手代丁稚口々に 若旦那お歸り々々々。

惣七 はい只今戻りました、今日はもう足が棒になつた、えらい〜。

ト上へ上り汗をふく。

忠兵衛 さうでござつしやらう、それにけふはごりわけ暑う御座りましたよつてなア。

トこの時上手からおとみ登場。

おとみ お、兄さんお歸り、暑うござつしたやろ。

惣七 唯今戻りました、何せよ北濱から天満へかけて十何軒歩いたのやさかい、もう汗が瀧のやうに流れた。

おとみ さうでござつしやろ、丁度今お風呂が沸きやしたさかい早う入つて衣服をお着更

へやす。

惣七 さうか、それは有難い、然し兄さんはまだか。

忠兵衛 へえ、旦那さんはまだお歸りや御座りまへん。

惣七 さうかそんなら風呂は後にせう、兄さんが歸りやはつてから。

おとみ い、え構えしまへん、あんさんが入つてしまつたら、あとへ番頭はんや手代衆に續いて入つて貰ふて、兄さんのお湯は別にかへてしまひやすさかい、先へお入りやす。

惣七 さうか、そんなら先へ入れて貰はう(ト再び降りやうとして幸七を認め)お、これは田中屋はんの手代さんか、暑いのに眼がくらんで、あんたの來てなはるのが見えなんだ。

(ト下へ降りる)

幸七 お暑う御座ります、相變らず御精の出る事で御座りますな。

惣七 いやもう貧乏ひまなしでな、ちよつと御免なはれや(ト上手の方へ行かうとして)忘れてゐた、備後町の寸伯さんが川芎をいつもだけ大急ぎで持つて來いといふ事やつた

さかい、すぐ小供をやつてんか。

忠兵衛 へえ承知いたしました。

惣七 頼みますせ。

ト上手勝手口へ退場、おさみも赤二重の上手へ退場。

忠兵衛 おい長松、お前御苦勞やが、寸伯さんへ一走り行てんか。

長松 へえ——。

忠兵衛 その箱の中にある方を一袋もつて行たらえゝのや。

長松 へえ……。

トこしらへをしてよき程に出てゆく。

幸七 番頭はん、こゝの旦那も弟御も兄弟揃うてよう働きやはとますなア、それに第一見てゐて羨しい程仲がえゝなア。

忠兵衛 さうや、私も長い事ゐるが、ごこの家でもようやる兄弟喧嘩といふものをたゞの一度も見た事がないなア。

幸七 結構だすなア、それにあの美しい娘はんは、あれはたしか親類の娘はんやさうなが若いのに家の事をようしやはりますなア。

忠兵衛 感心なものや、何せ御寮人さんがおかくれなはつてからといふものは、あの娘はん一人で臺所のきりもりから、旦那御兄弟の身のまはり何でも一切引受けて御座るのや。

幸七 何ですか、何れ行く行くは弟御の御寮人さんにでもなりはるつもりだつしやらう。

忠兵衛 さうやなあ、ごうせさうなるのやらう、何せあの娘はんも氣の毒な事に御兩親はなし、兄弟はなし、ほんまに孤兒でこゝの家の厄介になつてゐやはるのやよつてあれで若旦那の御寮人さんになりやはつたら、出ず入らずで、ごつちの都合もえゝわけや。

幸七 それにしても旦那の御寮人さんも早う定めんといきまへんなア、先の御寮人さんが亡うなつたのは、たしか一昨年だしたなあ。

忠兵衛 さうやこの春三回忌ももうすんだのやよつて早う後妻^{のちせき}を貰はないかんと方々か
らすゝめる人もあるやうやが、旦那はごういふものか氣がすゝまぬさうな。
幸七 へえ、妙やな、外に誰ぞえゝ女でも出来てるのやおまへんか。

このあたりよりあげ店にさしゐた目足が消ゆる。

忠兵衛 それは大丈夫、この頃のやうに堅うなつてはる旦那にそんな事は滅相ないの
やが、何ぞおもわくがあるのやらう。

幸七 思わくといふておかしいな、きつとなんぞあるのやせ、何ぞあるに違ひない。

忠兵衛 何がいな。

幸七 いゝえいな、旦那に女が……………。

忠兵衛 まだいふてるのかいな、お前さんも苦勞性やな、あつたかてほつときんかい
な。

幸七 それもさうだすな、はゝゝゝそれはえゝが旦那はエライ遅うおますなア。

忠兵衛 さア……………何をしてゐなはるのか……………あゝもう日が入つたな。

幸七 ほんにこれは愚圖々々してゐられぬ、そんなら番頭はん、けふは一先づ歸るとし

まよう、明日もう一べん伺ひますさかい、旦那にさう仰有つといとくなはれ。

忠兵衛 氣の毒やつたなア、さういふ譯やよつてお店へもよろしういふといて。

幸七 へえ、それは申して置きます、そんなら何分よろしう。

忠兵衛 承知しました、御苦勞はんやつた。

幸七 左様なら。(、下手へ退場)

藤七 番頭はん片づきました、そろ／＼店をしまひまよか。

幸七 むゝ、さうか、そんなら仕舞たがえゝ。

藤七 へえ……………さア竹松そんなら手傳へ。

ト表の上げ店を上げ入口の戸を下す、この中に淡路屋惣兵衛花道から登場、家へ入る。

藤七竹松 旦那さんお歸り々々々。

忠兵衛 おゝ旦那さんお歸り。

惣兵衛 はい唯今戻りました、エライ遅うなりました。

忠兵衛 ござまでおいでござりました、エラウお手間が取れましたな。

惣兵衛 いや、用はちき片附いたのやが、先さきで一杯よばれてな、この暑いのに日中に酒でもないのやが、やかましくいはれたので、つい………おかげで、あつい事々々々
(ご羽織をぬぎ結界に引かけながら)惣七はもう戻つてゐますか。

忠兵衛 へえ、先程お歸りで御座りました、唯今お風呂をお召しで御座ります。

惣兵衛 ふむ、さうか、そして留守中に誰も來なんだか。

忠兵衛 へえ、例の田中屋の手代がまた參りまして、あした又來ると申して歸りました。

惣兵衛 うむ相變らずせつろしい事やな、番頭ぞん安心して下され、ちやんと都合して來ました(ト懐中から小判の包を出し)そんならこゝに百兩あるさかい、これで明日拂ふてやつて。

忠兵衛 へえ畏りました、然しお金は店では用心が悪う御座りますさかい明日まで、どうぞ奥へお預りなはつて………。

惣兵衛 ふむ、それもさうやな、そんなら(ト奥の方へ)おどみ、おどみ、——おどみは居えへんのかいな。

忠兵衛 娘はん——娘はん——どうなはりましたか、ひよつとしたら若旦那のお風呂の加減でも——竹松一寸娘はんをお呼び申して——。

竹松 へエ——(ト上手の勝手へ行きかける)

惣兵衛 あゝこれ——(ト呼びよめて)呼ばいでもえゝわしが奥へ行きます(ト小判を持つて奥へ退場)

この時上手勝手口から女中登場

女中 番頭はん、御飯が出來ました。

忠兵衛 ナニ飯？、おい來た、さア藤七竹松早う來い、長松はまだ戻りくさらぬのか、あいつ仕様のない奴や、また道草をくふてけつかるのやな。

ト咳きながら一同勝手へ退場、舞臺空、漸次暗くなる、惣七湯上りの態で登場、おどみも續いて登場

惣七 あゝこれで氣がせい——した、夏の湯上りほごえゝ氣持のするものはないア。

とみ あんさん毎日風呂へ入つてやしてエライ垢やつたやごわへんか。

惣七 さうやな、垢擦を使ふた事がないよつてにな、今日はお前に流して貰ふたので、何やら皮が一枚はげたやうな氣がする。

とみ ほゝゝゝ、まア大相な、ちき御飯をあがりますか。

惣七 食べてもえゝが、兄さんはまだかいな。

とみ さア、えらう遅うごわすな、ごこへ行てですのやらう(ト結果の羽織に眼をつけ)あ、これは兄さんの、お羽織や、いつの間にやらおかへりらしうごわつせ。

惣七 何ちやいな、もう歸つてはるのか、そんなら奥へ行かう……………。

とみ あ、兄さん一寸……………私さつきいふた事あんさんから兄さんへいふて見とくれやすや。

惣七 ふむ、それはまアいふて見るけど、一寸困つたなア。

とみ 困つたといふて、あんさん……………

惣七 えゝわいな、兄さんの御機嫌を見計らうていふてやらう。

トこの時惣兵衛登場(浴衣と着更へてゐる)

惣七 あゝ、兄さんお歸り。

惣兵衛 はい唯今戻りました。

とみ 兄さんお歸り、私一寸も存じまへなだったので、エライ失禮しました、小さい兄さんのお風呂の加減をしてゐましたので。

惣兵衛 えゝとも々々々々ナニ俺も今戻つたばかりや。

惣七 兄さん風呂を先へ失禮いたしました、今日はあんまり歩いて汗みづくになつてゐましたので。

惣兵衛 さうやつたやらう、暑いのに御苦勞やつたな、そして御飯はまだか俺に遠慮なしに先にやつてや。

惣七 へえおほきに、兄さんは。

惣兵衛 俺はもちつと後にしやう、實は今日例の金の事を橋屋の勘右衛門さんどこへ頼みに行たのや、その方はまア都合よういたが、いつもの傳でのまされてな、あの人

の酒すきにも困るなア、時も處も構ふてへんのや。

さみ さうでござすか、そんなら兄さんあんさん先へおあがりやす、その中にお風呂の湯をかへて大きい兄さんに入つて貰ひやすさかい。

惣兵衛 風呂もさうせかいでもえ、それよか、大分暗うなつてきたよつて早う行燈を出して。

さみ へえ、すぐ持つて参ります、そんなら兄さんあんさんご飯を。

惣七 さうか、そんなら兄さんお先へ……………。

ト惣七は奥へおさみは上手へ退場、惣兵衛は結界の中から算盤を出し何か勘定する態、どこかで歌つてゐる地歌の三味線の音が聞えてくる惣兵衛は思はずうつとりさなりて歌を聞いてゐる。
おさみ行燈を出す、舞臺あかくなるまたぬれ手拭を入れた籠に衣紋竿を持ち出す。

さみ 兄さん、お風呂は今番頭さんがお先へいたゞいてゐますさかい、そのあとでお湯をかへてからお知らせ申します、その間に一寸お顔などお拭きやす。

惣兵衛 お、ぬれ手拭か、それは有り難い(ト手拭で顔をふく)お、これは冷たい、え、氣

持やな(この間に惣兵衛の羽織を衣紋さなにかけ店先につり下げる)

さみ しばらくかへて來ませうか。

惣兵衛 いや、もうえ、／＼、ほんまにお前にもすまんア、いつも／＼世話ばつか。かけて……………。

さみ あれ、いやでつせ、そんな事いふのは……………。

惣兵衛 イヤほんまにすまん、お前ももう年頃やよつてに、養子をするとか、お嫁にやるとか。

さみ え。

惣兵衛 相當身の片附きもしてやらんならんに、こんな工合でいつまでもお前にうちのことを何から何までさせてゐては、ほんまにすまんと思ふてゐる。

さみ あれ、兄さん、あんないやな事、私は……………私は嫁入りみたいなものしやしまへんわ。

惣兵衛 何をいふのや、女が嫁入せぬといふて、そんな事で一生ゆけるものかいな。

さみ いゝえ私きつと、きつと、私一生この家から出て行けへんわ。

惣兵衛 (半分獨り言のやうに) といふたかてまさかお前がわしの女房になるといふ譯にも行かぬやらうし。

さみ え。

惣兵衛 (一寸狼狽して) はゝゝゝ、いやもう暫くや辛棒してゝや。

さみ あ、またあんな事を、辛棒するもせんもあれいたしまへんわ、かうして小さい時からこのお家で育て、貰ふた御恩の事を思ふたらこんな事位當り前の事ですわ、私みたいなものゝ事をそないに氣にかけんと、それよか兄さんも早う後の姉さんを貰ひやすな。

惣兵衛 姉さん？さうやなア、随分人にも勧められるが、わしの今では、そこどころではないやうな氣もするし、それに、お前がかうしてゐてくれたら、女房はいらぬわけや。

さみ あれ、そないいはれると、私、つらうごわすわ、私在家のことを何もかもしてゐ

るので兄さんが姉さんを貰はずにいやはるとしたら、世間ではおかしう思ふかも知れしまへんわ。

惣兵衛 ふむ、何か、お前と俺が何ぞ怪しい譯でもあるやうに思はれるといふのか。

さみ あれ(ト眞赤になつた態) いゝえいな、そんな事やごわへんわ世間では小ちうこの事をやかましく申しますさかいなあ。

惣兵衛 そんな事は氣にせいでもえゝ、分る時が來たら分るのや、けれどな、もし世間でひよつとお前とわしがおかしいわけでもあるやうに噂をしたら。

さみ あれ……………。(トうつむいてしまふ)

惣兵衛 お前どうする。

さみ そんな事ごわすものかいな。

惣兵衛 いやないともいへぬ——もしそんな噂でもしたら——お前さぞつらい事やらうなア。

さみ ……………。

惣兵衛 けど……俺は……。

ト黙つてしまふ兩人暫く無言おとみ顔を上げて惣兵衛を見る惣兵衛おとみ顔見合せて稍狼狽した態で。

惣兵衛 は、勘忍して、わしは今外のことを考へてゐた、今歸りに大西の芝居の前を通つてふと看板を見たら、お半長右衛門の芝居をしてゐるやないか、久しう見んが面白い芝居やな、え、年をした中年の男が、肩あげも取れぬ小娘と情死する……：面白いやないか、それにしてもあれが俺の身の上であつたらどうやらう、世間では笑ふやらうか、悪口をいふやらうか、けれど、俺には長右衛門の心持がよう分つてゐるやうな氣がする。

おとみ 兄さんあんさん一體何を仰有つてるのだす。

惣兵衛 え……いや……は、俺はあの芝居が昔から好きでな、え、淨るりやせ桂川連理のしがらみ……柳馬場押小路……何とやらして、虎石町の西側で、主人は帶屋長右衛門……。

おとみ あ、兄さん、あんさん酔ふてやすな、は、。

惣兵衛 は、酔ふてゐるかいな、そないに呑みもせなんだが……一寸まはつて
るかな、は、。

この時勝手口から女中登場。

女中 旦那さん只今お風呂のお湯がかはりました。

惣兵衛 ナニお湯、さうか、それでは丁度え、そんなら一ぱい入つてこうか、あ、晝
の汗で身體がニチャ々々々して氣持が悪い。

ト立ちかゝる、女中退場。

おとみ さうでござつしやらう、どうぞ御ゆつくり。

ト立つて上り口の下駄を揃へてやる。

惣兵衛 はい、ありがたう々々々。

ト下に降りる、おとみ立たうとする。

惣兵衛 おとみ、一寸。

おとみ え、何ぞ御用。

惣兵衛 一寸向ふを向き、それ、こゝに糸屑が……………。

トおさみの鬚にかゝつてある糸屑をとつてやる。

とみ へえ、おほきに。

惣兵衛 どういたしましたして、はゝゝゝ。

ト勝手口へ退場、惣七奥から登場。

惣七 おさみ、兄さんはエライ御機嫌らしかつたな。

とみ へえ、いつにないえゝ御機嫌でつせ、先刻から私をつかまへて恥しい事ばかり
仰有るので困つてゐましたら、何の、芝居の話ですのやわ、はゝゝゝ。

惣七 大分酔ふてはるのやな、兄さんのお酒はいつもあれや。

とみ 兄さん、こんなえゝ時にさつきの話をしとくれやすな。

惣七 ふむ、そりやまあいふては見るけれど、ちつと言ひにくいなア。

とみ そんな事いふたかて、どうせ言はんならんことやごわへんか。

惣七 兄さんは私等の事を勘づいてゐやはれへんやらうか。

とみ 大丈夫御存じおまへん。

惣七 それが却つてつらいなア、今更實は二人はかうかうでおりますなんて、いはれへん
もの。

とみ さうかて言はなんたら、後で困ることが出来るやごはへんか、いはんごすむ事な
ら、もう暫く私かていはんごすましたいのやけど……………。

惣七 まあえゝ、兎も角いふて見よう、それでもし兄さんがいかんごでもいやはつたら
どうせう。

とみ 何ほ何かて、そんな事は仰有れしまへんわ。

惣七 けど、それはわかれへん、大體が弟の身分でこんな事兄さんにせがまれるわけの
ものやないのや、兄さんさへまだあゝして姉さんも出来てへんのに……………。

とみ 私もし兄さんがいかんご仰有つたら……………この家を出て行かなしやうがないわ
……………。

惣七 エ、出て行く、お前一體どこへ行く氣や。

とみごこといふて行く所はあれしまへんけど、さうかといふてこの儘こゝに居られへん事は判つてゐるやごわへんか、世間態せけんたいもある事やし……。

惣七 お前が出てゆくなら私も出てゆく。

さみエ、あんさんも出る？ そんな事したら兄さんごないに怒りやはりますやらう。

惣七 怒られたかて仕様がな、お前一家を出せるものかいな。

さみ（嬉しさうに） あんさんそないに私の事を思ふてとくれやすか。

惣七 當り前やないか、たとひ死んでも離れぬと約束した仲やないか。

さみ 兄さんそれは屹度？。

惣七 お前まだ私の心がわからへんのか。

さみ うれしおます！。

ト抱きつく、このさたん表の戸がかりさあく、長松登場。

長松 へえ唯今。

兩人驚いて飛びのく

長松 あ、若旦那、唯今歸りました。

惣七 何や、長松やないか、どこへ行てゐた。

長松 へえ、寸伯様の御注文をもつて参りましたが、寸伯様はお留守で、何やらまだ他に急な注文があるさかい、お歸りまで待つてゐいと仰有りましたので、唯今まで待つて居りました。

惣七 （いら／＼しながら） そしてその急な注文は聞いて來たか。

長松 へえ、そのやつぱり何もなかつたさうで……。

さみ 仕様のない子こやなア、早う臺所へ行て御飯をお上り。

長松 へえ——。 （ト勝手口へ退場）

惣七 あゝ吃驚した、あ奴今頃出てゐたのをこゝつと忘れてゐた、見られへんだやろか。

さみ 見られたかて構えしまへんわ、ごうせわかる事ですもの。

惣七 ふむ——兎も角今晚思ひきつて兄さんにいふて見よう。

さみ さうしどくれやす、兄さんかて昔は随分粹な所へも出入してはつたお方ですもの
言ひ出したらごんなえ、都合にしてくれはるかも知れしまへん。

惣七 成程それもさうや、案ずるより生むが易いといふ事もあるよつてなア。

この時勝手口から惣兵衛登場。

惣七 あ、兄さんエライ早いお風呂でしたな。

惣兵衛 あ、これでさつぱりした。酒をのんで風呂へ入ると卒中になるときいてゐたさ
かい、鳥からすの行水ほごで上つて来たが、やつぱり風呂はえゝなア、おとみ、お前もま
だやらう、今丁度上加減や、早う入つといで。

さみ へえおほきに、そんなら私も今の中に入つて来ませう、兄さんそんなら……………。

ト惣七の方へ眼で知らず、惣七承知したといふ眼付、おとみ退場。

惣七 兄さん、あんたも今日はえらうごわしたやらう、随分暑うごわしたなア。

惣兵衛 お前も今日は御苦勞やつた、さうして注文はどうやつた。

惣七 へえ大分貰うて来ましたが、此間天満の紀の國屋へやつた甘草かんぞうが品が違うてゐる

といふてエライ小言でしたせ。

惣兵衛 そんな筈はないのやが、一ぺん番頭にきいて見て……………何のかの云ふて又値
切るのやないかいな。

惣七 さうかも知れしまへんせ、この頃の商人あきんどは油断がなりまへんよつてなア。

惣兵衛 世の中がせち辛うなつたのやな。並や大抵では商賣が立つてゆけへん。然しま
アお前もかうして精出してくれるので、私もほんまに喜んでるのやせ。

惣七 そないにいられるとえらい氣づゝなうおます……………けれど私いつもさう思ひます
のや——かうして兄弟仲よう精を出してゐる所を死にやはつたお父さんやお母はん
に一目見て貰ひたうおます。

惣兵衛 何をいふてるのや、そんな返らぬ繰り言をいふても始らぬ事やないか。それに
つけてもお前はお父さんやお母はんの可愛兒かあいこやつたさかい、女房も早う貰うて、分
家もさしてやらんならんと私は思てるのやが、知つての通りの仕末やさかい、まア
もうちつと辛棒してゐてや。

惣七 兄さん、私そんな事何とも思ふてしまへんせ、分家みたいなものさして貰はいでも構えしまへん。

惣兵衛 イヤ、けれどさういふわけにもゆけへん、兄に生れた私の世間態もある事やよつてな。

惣七 そない私の事を思ふてとくなはるのなら私分家よりも、もつと外のお頼みがおますのやが……兄さんきいとくなはるか。

惣兵衛 ナニ頼み？ エライ改まつた話やな。それは一體何や。

惣七 へえ——それがちつといひにくい事やが……あの……話が出たさかい申しますが……あの……

惣兵衛 何や、早ういひな。

惣七 ……私、あの……夫婦にしてほしい女がおますのや。

惣兵衛 エ、夫婦？ へえ——一體それはまアごこの女や。

惣七 それがその……實はいひにくい事ですが……あの……うちのおとみと……

……

惣兵衛 エツ、おとみ？ あのおとみとお前が夫婦に……

惣七 兄さん叱らんと置いとくなはれ、實はおとみとはもう四月程前から夫婦の約束をしました……

惣兵衛 な、なんやと！

惣七 兄さん勘忍しとくはなれ、兄さんの眼を盗んで淫らな事したのは悪うおましたけれど……けれど、今更私らはもうどうする事も出来しまへん。どうぞ許しとくなはれ、お願だす、お願だす。

惣兵衛 ならぬ！ そんな事はならぬわい！

惣七 エツならぬ？ 兄さん、そんなら私等の事は不服とでも？

惣兵衛 不服もくそもあつたものか、おのれ、おとみめ、ふ、不埒な奴や、ようも今日まで私の目を……おとみを呼べ、おとみを、おとみ！ おとみ！

ト立ちあがる、惣七さりとて。

惣七 兄さん、ま、まア待つとくはなはれ、あんたおとみを呼んでどうなはるつもりだす。

惣兵衛 どうするもかうするものか、あ奴俺を今日までようも騙してゐやがったな、何といふ不埒な……………。

惣七 それは悪かつたといふてゐるやおまへんか、けれど、それも私の口からいふのも何やが、兄さんがそれ程怒りなはる程悪い事でもないやおまへんか、若い男と女の仲の間違は世間にもようある事やし……………。

惣兵衛 え、やかましい、勝手な理屈をいふな。よう考へて見い、家には奉公人もある出入の者もある。微祿しても淡路屋は人にも知られた古い暖簾や、その臺所が淫らやといはれて世間の恥にならぬと思ふてるのか、それで奉公人の示しがつくと思ふてるか。

惣七 さアそやよつて、あやまつてゐるやおまへんか、それに店の者も世間の者もまだ何にも知らぬ事だす。兄さんさへ今許しとくはなはつたら、今までの事は誰にも知ら

れずにする事だす。

惣兵衛 勝手な事ばかりいふな！そんな事が知れずにすると思てるか。

惣七 よしまた知れたかて、え、やおまへんか、これが兄さんの女を私が横ざりしたといふわけやなし……………。

惣兵衛 おのれまだそんな事を……………。

トつかみかゝらうとする。

惣七 何や、何や、あんたどうしやうといひなはるのや、黙つてゐればえ、事にしてあんた、無理を通さうとしなはるのやな。

惣兵衛 何が無理や、家の不仕だらを取り締るのに何が無理や。

惣七 フンようそんな事がいへたもんや、あんたかて何やいな。毎日日茶屋酒につかつてゐなはつた事もあるやないか。

惣兵衛 おのれ兄に向ふて、な、なんといふ事を……………。

ト算盤をつかみ、振りあげて惣七を打たうとする。

惣七 ナニ、兄がどうしたんや、そんな譯のわからぬ兄が。
惣兵衛 おのれ！。

惣七 さア叩いて見い！。

ト互に立ち上つて挑み合ふ。奥からおさみ走り出る。

さみ あれ、兄さん、兄さん、ま、まア待つとくはなはれ〜(トわけて入る)

惣兵衛 おゝ、おのれはおさみ、ようも今までこの俺の目を……………。

とみ 勘忍しとくれやす、私が悪うごわした。どうぞ勘忍して……………。(ト泣く)

この間に勝手口から番頭手代等姿を出し、驚いた風で目ひき袖ひきしながら見てゐる。

惣七 何もお前があやまる事はない。兄貴がわからぬのや、こんなわからぬ兄貴が……………。

惣兵衛 おのれまだ……………。(トかゝらうとする)

さみ まア待つて〜、兄さん、先刻から私皆きいてゐました。どうぞそないに怒らん
といとくれやす。

惣兵衛 おのれ悪かつたですむと思ふてるか——えゝもうこんな女は一刻も家に置いて置くわけにはゆかん。たつた今から何處へなりと出て行て貰はう。出てゆけ、出てゆけ！。

惣七 ナニ出てゆけ？ よういひなはつた。さアおさみ出て行き〜、お前一人出てゆく
のやない、俺も出るのや、こんな所にゐいでも二人の暮す所は他にたんとある。さ
ア一所に出やう。

惣兵衛 ナニ二人で家を出る？ そんな事は俺は許さん、惣七は家から出さんよつてさう
思へ……………。

この間に上手に出てゐた手代丁稚等互に何か囁き合ふのを番頭制して一同あつちへ行けと促す態で退場。

惣七 はふといて貰はう、私の勝手や、あんたが何ばいふたかて家にゐるものかいな。
惣兵衛 ナニツ。

さみ 兄さん。勘忍しとくれやす、私出てゆくのは構えしまへんけれど、たごひ出て行
ても私と惣七兄さんの仲はもう切るに切られぬ事になつてゐるのでおます。

惣兵衛 エ。

こみ 私は……私はもう……たゞの身體やおまへん……。(ト泣く)

惣兵衛 え、ッ、たゞの身體でないとは、そんなら、そんならもうお前は身重にでも……

こみ 勘忍しとくれやす。そんなわけですさかい……どうぞ今度の事は……大目に見とくれやす。願っておます〜。

惣兵衛 わ——。(ト驚きと失望に混乱した表情)

惣七 おとみ、何をいふてるのや。今更もう頼む事も願ふ事もいらぬ事や、二人手に手を取つて出て行たらえ、のや。フン、廣い世界にこゝの家計りに口の照るわけやあるまいし。

こみ けれど……私考へて見たら何ぼ何でも、あんさんにこの家を出て貰うて、一所に苦勞さす事は出来しまへん。親も兄弟もない私が、今日までかうして成長おほきうして貰うたのも皆兄さんや、伯父さんや伯母はんのお蔭でおます、それがこんな不仕

だらをして、あんさんまで家を引き出しては、私どうしてもすみまへん……。

惣七 さうかて俺はお前と別れて、この儘家へ残る位なら、いつそ死ぬ方がましや。

こみ そやよつて兄さんお願してゐるのだす、なア兄さん、どうぞ今度の事は勘忍しとくれやす、私何も惣七兄さんの御察人さんにして貰はいでよろしおます。お乳母でも構えしまへん、女子衆でもかまえしまへん。どうぞ今まで通りにして置いといてくれやす。願っておます〜。

惣兵衛 ……(無言)……あ、私はもう心をきめた、惣七、お前の望み通り、おとみをつれて何處へなりと出てゆけ。

とみ エ、出てゆけ？そんなら兄さん、あんさんどうしても許してはくれはりまへんのでつか。

惣七 許して貰はいでもえ、やないか、かうなつたらこつちの勝手や。家が何や、兄弟が何や、お世話にならぬ遠慮はいらぬ事や、さアおとみ、支度をしい、行かう行かう。

ト立ちかゝる。

惣兵衛 惣七待て、一寸いふ事がある。

惣七 ナニ、いふ事がある？かうなつたら聞く事はない筈やが、何ぞ用だすかいな。
惣兵衛 家を出しなに、これ丈の事はいふて置きたい、まア座り。

惣七 何や、早ういふとくはなはれ、さア聞かう。

惣兵衛 やかましよういふな、おごみ、お前はあつちへ行き、二人だけで話したい事があるのや。

ごみ へえ——。(ト怪訝な顔で立つ、退場)

惣兵衛 惣七暫く無言、やがて惣兵衛ホツと息をつく。

惣兵衛 (獨り言のやうに) あゝ人間といふものはあさましいものや……………ほんまに淺ましい……………惣七、お前と俺と、こんな激しい争をした事が、今までに一度でもあつたかいなア……………。

惣七 そんな事はどうでもえ、用があるなら早ういふて貰はう。

惣兵衛 ……………私らは生れて初めてこんな争をした。而ももうこれで一生取りかへしのつかぬ仲になつてしまふたのや。

惣七 ナニ、取り返しがつかぬ？。

惣兵衛 さうや、もう取り返しがつかぬ。今更お前もおごみと別れる氣にはなれまい、といふて、俺はまたお前等の仲を裂かすには居られん。かうして二人は死ぬまで争ふてゐねばならぬのや。

惣七 何やて？黙つてきいてゐると、あんた妙な事ばかりいふな。あんたはまた何でそないに私等の仲を裂かんなんのや、いゝえいな、こんなしやうもない事で、何でそないに根をもたんなんのや……………フンえ、年をして、若い者の仲を恠氣するならおいて貰はう。

惣兵衛 ナニ恠氣？ふむ、恠氣かも知れぬ……………惣七、かうなつたら私は皆いふてしまふ、實は……………私も……………私もおごみに戀をしてゐたのや。

惣七 えゝツ。

惣兵衛 惣七、笑ふてくれるな、この年になつて、よう恥しうもないと思ふやらう。けれど、人の戀には年はない筈や。

惣七 そ、そんなら兄さんも、あのおごみに、へえ………。(ト驚く)

惣兵衛 然し俺は今になつてやつと氣がついた。わしはいつのまにやら、もうあんな娘に戀をする價値のない男になつてしまふてゐたのや——わしは今まであの娘のためにどのやうに心を苦めてゐたか知れへん。けれど、どうしてもそれをよう言ひ出さなんだ。こんな年をして、もしそんな事したら、人が何といふて笑ふやらう。店の者の手前、第一お前の手前、わしは面目なうて顔があげられんやうな氣がした。

惣七 兄さん！

惣兵衛 わしはまア何といふ卑怯な男や。戀をするのに人が何や、世間が何や、そんな事にこだはつて居て戀が出来るか………それでもやつぱり私は世間態が恥しかった。面目が惜しかった、………あゝ昔はこんな事ではなかつた。世間も家も忘れて狂ふた時であつた。けれど今ではもう、そんな眞剣な心にならうと思ふてもなれぬや

うになつた。

惣七 兄さん！勘忍しとくなはれ、私何も知らずに、すまん事をしてしまひました。私………私ごうしたらえゝのか………わかりまへん………。

惣兵衛 心配する事はない、私はあきらめる事にした。

惣七 エ、あきらめる？

惣兵衛 年からいふても身分から考へてもわしにはおごみに戀をする價値はない。惣七 わしは、お前やおとみのために、潔うあきらめやう。

惣七 エ、そんなら兄さんは私とおとみと夫婦にしてやらうと思ふのだすか。

惣兵衛 ……。(ト黙つてうなづく)

惣七 あり難うござります——、それを許しとくなはるなら私、こんな嬉しい事はおまへん——。(ト急に洗んで)けれど——兄さんは——。

惣兵衛 惣七、そこでわしから改めて頼みがあるのや、お前氣の毒やが、どうぞこの家を立のいてはくれまいか。

惣七 えゝ。

惣兵衛 勘忍してくれ、戀の叶はぬ意趣でいふのではない。わしの心にもなつてくれ、自分の戀した女が弟と夫婦になつてゐるのを……あゝ、俺は何といふ淺ましい人間になつてしまふたのや、血肉をわけた弟の喜びを怨めし相に見ねばならぬとは……俺の心は何といふきたない……あゝ天魔が私に喰ひ入つたのか……

惣七 兄さん！もういふとくなはるな、わかりました。私は家を出て行きます。

惣兵衛 ナニ出てくれる？惣七すまん。許してくれ……

惣七 何をいひなはるのや、私こそ兄さんに濟みまへん。どうせ私は次男だす、いつまでも兄さんのお世話になつてゐられるものでもおまへん。かうしておとみと一所にして貰ふて、まだその上に兄さんのお心を苦しめては濟みまへん……

惣兵衛 よういふてくれた。戀の太刀打に負けたあはれな兄へのせめてもの心づくしと思ふて、心よう出て行てくれ。

惣七 もういはんといとくなはれ、私は喜んで、出て行きます。

惣兵衛 さうか有難う、お前がその氣になつてくれるなら、私はお前にやるものがある一寸まつてくれ。

ト立ちかゝる

惣七 エ、やるもの？

惣兵衛 一寸待つてくれ。

ト奥へ退場、この時おとみ上手から轉び出る。

おとみ 兄さん！私皆聞いてゐました（ト泣く）

惣七 おゝおとみ、聞いたか、えらい事になつてしまふた。

おとみ 私大きい兄さんにすみまへん。どうしたらよろしおますのや、私すみません——

惣七 すまんといふて、ごうもならん事や、もうかうなつたら兄さんの仰有つる通り出てゆく外はない、これがせめてもの兄さんへの親切や。

おとみ 出て行くのはよろしおますけれど、さうしたらこれで兄さん同士の縁が切れるの

やおまへんか、そんな事になつたら、私もう死にやはつた伯父さんや伯母はんに申
譯がおまへん……私、私申譯が……（泣く）

惣七 ……（當惑した顔）

この時惣兵衛再び登場

惣兵衛 おゝ、おごみ。

さみ あゝ兄さん！私皆聞きました、すみまへんく。

惣兵衛 ……あゝもういふてくれるな。私はお前に顔を合はすのも恥しい……さ、

惣七 こゝに百兩ある。店の用意に都合して來た金やが、お前への餞別や持つてゐて
くれ。

惣七 エ、その金を……そんな事したら店の方が……

惣兵衛 構えへん、店の方はまた何とか都合する。遠慮はいらぬ事や、お前も一文なし
では家は出られぬやないか……

惣七 へえ……

惣兵衛 ——それでな、家を出ても外へ行くのやないせ。京へ上つて麩屋町の巴屋久
兵衛の所へ行くがえゝ。私からも手紙をやつて置くよつて、あの人による相談をし
て身の振り方をつけてくれ。

惣七 へえ……兄さん……そして……そして私等は、もう兄さんと往來は出來ま
へんか……

惣兵衛 往來……手紙の往來ならな……

惣七 エ、手紙の？

惣兵衛 そりやまア、時々たよりの便も聞きたし、問はれもしたし……けぞ……あゝいや
月がたち年がたつたら、わしのこの心の傷も癒えるやらう。その時は……その時
はまたお前やおごみ……それに……二人の間の子供の顔も……あゝ、それま
では便りもしてくれるな。

さみ 兄さん！私、私すみまへん、勘忍しどくれやすく（ト泣入る）

三人無言や、暫く間

惣兵衛 (突然思ひついた様に) あゝ、さうや、今晚は一つ久し振りで曾根崎へ行く。
惣七 エ、曾根崎へ？。

惣兵衛 はゝゝゝ (淋しく笑つて) 妙なものやな。互に知らぬ間なら兎も角、かう知つて見
るごもうお前達と片時も一所に居られぬやうな氣がする。

惣七 へえ……………。

惣兵衛 今夜は久振りで遊んで来う、おごみ羽織を出してんか。

ごみ へえ…………… (ト返事をしたがもちくしてゐる)

惣兵衛 惣七、こんな事いひ悪い事やが、なるべくなら今夜俺の居ぬ間にこの家から
出て貰へまいか。

惣七 へえ……………そんなら兄さん、今夜はお歸りやおまへんか。

惣兵衛 むゝ今夜は歸らぬ。久し振りで夜ごほしの大騒ぎをして見てやらう…………… (ト立
ちかけて) あゝ、けれどなア、俺はもう以前のやうに何も思はずに羽目を外して遊ぶ
やうな氣持ちになれるか知らん……………えゝ今からこんな事でどうなる。俺はまだ若

いのや、はゝゝゝ、わゝ行かう行かう、おごみ羽織は……………。
ごみ はい唯今……………。

ト衣紋竿の羽織を取つて着せかけてじつと惣兵衛の肩に手を置いたまゝ思入れ

惣兵衛 あゝお前には長いこと世話をかけたなア、かうしてお前に羽織を着せて貰ふの
もこれ限りで……………。

ごみ 兄さん！ (ト思はずすがり付かうとする)

惣兵衛 わゝもう行かう (トおごみを拂ひのけるやうにして立ち上る)

三人無言惣兵衛は下に降りる

やがて戸口の方へよつて門の戸を開けながら

惣兵衛 そんなら行て来ます。

ごみ (泣き聲をのみながら) お早う……………お早うお歸りやす。

惣兵衛 むゝ、さうしてお前たちは……………^{たっしや}壯健で暮してや。

ト門口を出やうとする

惣七 兄さん！。

さかけよつて袖をさらへやうとする。惣兵衛すばやく門口へ出て戸をがらり閉める。

三人はもう一度何かいはうとしたが胸がつかへて物が言へないで立ちすくんでゐる、やがて三人の忍びやかな啜り泣の聲が洩れて出る。(幕)

(大正十一年十月京都明治座上演)

やもめ鴉

場所——島の内の街路。

時——徳川末期のある秋の夜。

登場人物——和泉屋某の倅與兵衛、遊び人立花屋八五郎。

舞臺——正面の中央に非常に大きな怪物の如き柳の木一本、舞臺全體を威壓するやうに廣く長く枝をたれてゐる。後ろに川を隔て、街の燈が連つてゐる。幕があくま眞つ暗で、纔かに樹の影と對岸の街の燈が見える程度である、やがて漸次明るくなる時、和泉屋與兵衛が木の下に悄然と立つてゐるのがわかる。舞臺の光線は紫色を用ひ甚だ陰鬱である。上手の上から月の光の態で斜に大きく且つ強烈な白色の光線をなげる。與兵衛は物思に沈みながら歩いて出る。意を決した風でつか／＼上手へゆきかけたが、また思ひ返した様子で跡へ戻るなど、頼りに思ひなやむ態である。下手から立花屋八五郎登場、少し酔つてゐる。迂散臭さうに與兵衛を見る。

八五郎 そこにゐるのは和泉やの與兵衛ではないか。

與兵衛 (ト見て不興げに) あゝ、おぬしは立花屋八五郎——どこへ行く——。

八五郎 何所へ行くとは知れた事だ、戀しい様の御許へ通ひ參らせ候かしくか、はゝゝゝ、然しまアそちは氣の毒な者ぢやなア。

與兵衛 ナニ。

八五郎 はてそのやうに腹を立てる事はない。聞けばそちは勘當になつたさうな。可哀さうに、さすがのそちも、とやを蹴出されたやもめ鴉になつては、そんなもつては、たきはきかぬの、はゝゝゝゝ、そしてまた今頃何の用が有つてこんな所をうろくしてゐる。

與兵衛 ほつて置いて貰ひませう、そちの厄介になりはしまいし……ちやがまア親切が有るなら井筒の柴舟に言傳をしてくりやれ、そなたの事が忘れられずにこんな所へ迷ふて來てゐたといふてくれ。

八五郎 何をぬかすのぢや、あほらしい。柴舟はもうそちの者ではない、今ではおれ一

人が誰憚らず通ふてゐる女ぢや、そちの嘴は入れさゝぬ。

與兵衛 ナニそち一人が？はゝゝゝ何ほ通ふてもそれはあかぬ事ぢや、そちがああ柴舟をわしの手から横取りしやうとしてゐたのは昨日や今日の事ではなかつた。それでも柴舟はわしに心中立てゝそちには何としてもなびかなんだではないか。それが今更になつて、何でまた……。

八五郎 やい／＼口が横にさけてゐると思ふて、あんまりな事を喋るまい。これ、そちと柴舟はごんな仲かは知らぬがの、對手は傾城、そなたは客、して見りや廓のしきたり通り金の切れ目が縁の切目よ。勘當の日蔭者で揚屋の出入りもならぬそちが、いまだに柴舟を我者扱ひはちと分に過ぎる。出なをして來やれ。

與兵衛 たとひ勘當になつても揚屋はとまつても、わしと柴舟の仲はごまりはせぬ、切れはせぬ。

八五郎 さて／＼困つた代物ぢや。よいわ、さうやつて自分獨りぎめにきめてゐるがよい、今に鼻あかされて泣面かかう。

與兵衛 そんな事があるものか、柴舟はそんな女ではない、そなたも精々通ふて、いやがれて来るがよい。

八五郎 (むつみする心を抑へて) ふん、いやといふならいやでもよい、きらひといふならきらひでよい、やがてそのいやな嫌な男が、手をかへ品をかへる情の毘に知らずく巻込まれて、いつのまにやら、のつびきならぬ泥沼に、はまり込んだが最期の助、もがけばもがく程、猶深みへ引づりこまれて行く、女の心が見物ぢやわ。

與兵衛 八五郎！

八五郎 なア與兵衛、おれはそちと違ふて、金をたんと持つてゐる、其上憚りながら界限きつての顔役だ、よく覺へて置け。

與兵衛 そちは意地づく張づくの金と威光で、柴舟を無理往生ささうといふのぢやな。
八五郎 はくく(獨り言のやうに)面白い事ぢやな、たごひ無理往生にせよ、一旦男の手の物になつたが最期、女の意久地なさを見てやりや、厭がつた嫌うたも昔の夢、いつの間にやらその嫌な男に心中立るまで吸ひよせられる、はくく俺はさうなつた時

の女の顔と、そしてそなたの顔が見てやりたい。

與兵衛 エゝそなたはまア何としたむごたらしい男ぢや。そちが女に通ふのは、惚れて戀して通ふのでない、女の心を思ふまゝに打たゝきがしたうて通ふてゐるのぢやな
八五郎 ふくくく與兵衛、そちももちつと極道してみやれ、嫌がる女に惚れる程面白いことはないものぢやぞ。

與兵衛 エゝ何をぬかすのぢや、柴舟はそちの思ふやうにはならぬぞよ。口はばたい事いふて、跡で面目玉をつぶさぬ用心が肝心ぢや。

八五郎 何、口はばたい？ フンこれ與兵衛、女の心といふものは、それ程堅いものぢやとそちは思ふてゐるか。

與兵衛 思はいでか、女といふものはかうと思ひ詰めたら只一と筋のものぢやぞよ、そちのやうなまことの戀を知らぬ男にそれが分つてたまるものか。

八五郎 ようぬかした、その一と筋の女心がどう間違ふて横道へ外れやうものでもない、女は弱いものぢやでなア。(トカを入れていふ)

與兵衛（不安になつて）ナニ。

八五郎 俺もかうなつたら意地づくちや、見事今夜のうちにかたをつけて見せやう。

與兵衛 ナニ今夜の中に？エ、そちはそれが出来るか、エ、そ、それは一體どうしやう
といふのちや。

八五郎 ハテどうしやうとかうしやうとおれの勝手ちや。與兵衛、おれといふ男はの、
一端かうと思ひ込んだ上は、横紙を破つても仕遂げすには置かぬ、といふのが性分
ちや、よう聞いておけ。どれ、ぼつ／＼と行てこまさう。

與兵衛 これ、ち、一寸まつてくれ。

八五郎 うるさい奴ちや、いつまでひつばるのちや。

與兵衛 いくや、俺はききたい、そちは……………そちは……………。(ト八五郎の胸をさる)
八五郎 エ、何をさらすのちや。

ト強く振り離れたので與兵衛はよろ／＼と膝をつく八五郎退場。

與兵衛 エ、どうすりめ、何ぼ鐵砲ぬかしたとて、そんな手に與兵衛はのらぬぞよ、お

のれのやうな獸に、は、は、は、何で柴舟がなびいて耐るものか。おれとあれとは並大
抵の仲ではないぞよ、二世はおろか三世も四世も、神ぞ命と言ひかはした仲ちや……
……いや、いや、然しあいつには金がある、力がある。どんな拍子で柴舟がなびか
うものでも……………エ、こりやどうせう、どうするといふて、あ、わしにはどうも
ならぬ。はアこりや氣がもめるが、まさか柴舟に限つて……………いやいやもしひよつ
として……………え、こりやちつとしてゐられぬ、せめて井筒屋の格子先まででも！
……………さうちや……………。

と上手へ走り入る。此時下手の方にて繁太夫節を流し歩く三味線の音遠く聞ゆ此三味線の音は舞臺の裏
を下手より上手へ歸つて行く與兵衛上手より再び登場。

與兵衛 あ、おれは何としてかう氣が弱いのか、井筒屋の行燈が目につくと、足がす
くんでしまふたではないか、此姿が誰に恥しいのか、この顔が誰にさすのか、
エ、おれはどうしてこのやうに……………あ、(ト上手へ行かけて又戻る。あきらめた風で)た、
もう頼むのは柴舟の心一つちや、あれの心さへ堅ければ、何ぼ横紙破りの八五郎ち

やとて、どうにもならぬ事ではないか。俺は、もうやきもきすまい……え、それにしても柴舟は今頃どうしてゐやう、やつぱりわしの身を思ひつゞけてか、それとももうふつつり思ひきつて……え、そんな事があるものか……と思ふてはゐるが……勤めの女、又ごんな風かぜがふいて……あ、こりや耐らぬ……。

ト頭をかへて樹の下に蹲る此時上手にて繁太夫節の聲。與兵衛うるささうに聞くまいとするが知らず知らず聞き入つてしまふ。

繁太夫（おふさ）
徳兵衛

いごしぼや氣をもまんすゆるゑにやら、顔にたんご
やせがきた、その苦は誰がさするぞや、みんなわし
ゆるゑご、それはく忘るゝ事の有にこそ合さりなが
らもう苦にしては下さすんな、かういへばごうやら
すねていふにはにたれごも、みぢんもさうした心は
ない

與兵衛『あれ、何といふ嬉しい歌ぢや、今うたふた繁太夫節は、おふさ徳兵衛のわりな
い情の戀物語、あのおふさの心が柴舟の心の辻占ならぬとおりや安心して……い
やく、そんな事が當あてになるものか、こちらの今の身分と八五郎の身分とをくらべ
たら、どう考へても勝目のない達引……はアやつぱり氣がもめる、こりやちつと
はして居られぬ、ぬゝもう恥も外聞もある事か。

ト走りかゝる此時上手から八五郎登場。落ちついてはゐるがどこかに不安らしい様子。

與兵衛 ヤ、八五郎、お、さア柴舟は、どうした柴舟は、そなたのいふ事をきいたか
さア柴舟は……。

八五郎 やかましういふなわ、柴舟はの。

與兵衛 お、柴舟は……。

八五郎 どうくおれの者にしてのけた。

與兵衛 ぬゝツ……。(トよろくとする)

八五郎 さアもう何といふても叶はぬ事ぢや。柴舟は盡未來、おれのものになつた證據

や、はふふふ。
八五郎 うぬ！。

ト再び斬る、與兵衛倒れる、八五郎尙も振りかぶつて斬り下さうとする、此時上手にて繁太夫節を流す三味線の音近く聞へ出す。八五郎は此音に吐驚した態で其儘下手へ逃げて仕舞ふ。三味線の音はそのまゝ漸次遠かつてゆく。此間に與兵衛は再びよろ／＼立ちあがつたが、歩く氣勢もなく、柴舟の片袖をしつかり抱きしめたまゝばつたり倒れる。流しの三味線の遠音の中に静かに。

(幕)

(大正九年十月大阪中座上演)

大正十一年十月五日印刷納本
大正十一年十月十日初版發行

大西利夫脚本集

【正價金壹圓五拾錢】



著者	大西利夫
發行人	武藤 欽
印刷人	堀井 清
	京都市下長者町油小路西入
	京都市新町通り北小路上ル

發行所
東京市芝區南佐久間町二ノ一四(電話芝七四五七)座東京八〇〇六一
京都市下長者町通油小路西へ入(電話五四九九七)座大阪六三〇九二
文 献 書 院

目書刊近新院書献文

太宰衛門著 (戯曲) 嗚呼蓮如	四六判 二百餘頁 寫真入 正價壹圓七拾錢 送料拾五錢
手島文倉著 苦悶の釋迦	四六判 三百餘頁 正價貳圓貳拾錢 送料拾七錢
加藤順三著 近松戯曲新研究	四六判 三百頁 正價貳圓 送料拾五錢
片山孤村著 現代の獨逸文化及文藝	四六判 二百四十頁 正價貳圓 送料拾參錢
藤代素人著 文化境と自然境	四六判 三百頁 正價貳圓 送料拾五錢
鹽見清共譯 新譯セキスピア物語	四六判 二百八十頁 正價壹圓八拾錢 送料拾五錢
同さくら子等 英文學註譯叢書	全部 金壹圓五拾錢
竹友藻風著 近代獨逸文學叢書	全部 十二月二冊宛發行
藤代禎輔監修 本院編輯部名著梗概文庫	三六判 每月數冊發行
谷本富著 書齋より主婦と女學生へ	四六判 二八六頁 正價貳圓 送料拾五錢
禿氏祐祥編註 蓮如上人御文全集	菊判 四百餘頁 寫真數葉入 正價四圓 送料貳拾參錢

506
279